
~ 三国志NET物語 ~ 『将星流転』

伊耶那岐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『三国志NET物語』 『将星流転』

【Nコード】

N 6 7 1 3 M

【作者名】

伊耶那岐

【あらすじ】

実際の戦略・戦術を想定した本格派戦争ノベル。誇りと理念を掲げて統べる指揮官、戦略的駆け引きを行う外交官、相手の心理を見透かして仕掛ける天才軍師……。

正攻法、奇策、心理戦、様々な将星たちが知略をつくし、誇りをかけて電腦空間を今駆け巡る。

第一話『将星は流転す』

21世紀、人々は自らの理想を電腦空間へと投影した。投影されたキャラクターはその理想世界を作るため理想と野望の炎を燃やし、ある者はそれを体現し、またある者は散っていった。

この電腦空間にはCOOLが存在し、理想と野望の炎は冷却され全てが初期化される。しかしその将星たちの熱き思いは記録と記憶に永遠と残り続ける。

記録に残った者・残らなかった者・拘らない者、様々な将星が存在するが、それらは再び激しい炎を燃やしこの電腦空間に蘇る。前期の私怨に拘る者、恨みは水に流し手を取り合う者、前期の恩義を果たそうとするもの、再生する者の思いもそれぞれであった。

将星は流転す・・・

これはそうしたプレイヤーたちの記録と記憶の物語である。

設定：

- ・1ターン30分
- ・リアル24時間〃ゲーム内4年
- ・年月・地域によって仕様変更あり

この物語はフィクションです。maccyu氏が開発したCGIゲーム『三国志NET』を題材としておりますが、実際のプレイヤーとは一切関係ございません。

筆者は複数の鯖をプレイしておりますが、こちらの鯖によく登録しています。

【一休システム ターボ MAP1】

<http://www9.plala.or.jp/system>

19 / games / sangokunet /

第二話『金剛の光と闇』

電腦歴200年、君主・金剛^{コンゴウ}率いる金剛国が第一期目の統一を果たした。それは圧倒的な人数差による戦略での統一であり、その人員確保の根拠は彼の強烈なカリスマにあった。

金剛国の序盤戦略は周囲を堅実に外交で固め、勝ちやすい国を狙って順番に破棄をして各個撃破し消耗を最小限に留め、時には静観戦略によって蓄財・鍛錬をし決して無理をして戦わずと無駄のない教科書通りとも言える戦略であった。このことから人々は彼を完全皇帝と賞賛した。

金剛もまた己の類稀なる戦略家としての資質を自覚しており、己より優れたプレイヤーはいないと思うようになっていった。

また金剛は猜疑心の強い部分があり、外交・指揮・国政における全ての指揮権を中央に集中させ、その国家体制は帝国主義化していった。

そうした金剛の自我の拡大は自らの登録名にも表れ、第二期は国名を「金剛帝国」、キャラ名を「金剛皇帝」と改名し、自ら皇帝と名乗るようになった。

また電腦歴200年を金剛歴元年と改め、自らが時代を切り開く覇者としての意志表明をした。

第二期が開始されてからも金剛皇帝を崇拜するプレイヤーは多く、金剛帝国は初期に人員を多く確保し破竹の勢いでその勢力を拡大していった。

しかし彼は敵対する国に対しては容赦がなかった。ちょっとした誤爆によって必要以上にその否を攻め立て開戦の口実としたりと。この話についてはある噂があった。誤爆したのは金剛の息の掛かった^{スパイ}潜入プレイヤーであり、わざと誤爆させたのだと。

この噂は彼が普段から「規約違反でない限り仕様で出来ることなら

何でも可である」とする言動から推測すると信憑性があつたものの証拠は存在せず噂レベルに留まつた。

完璧主義が光とするなら影の部分は強い猜疑心とも言えるが、金剛は彼を支持・崇拝するプレイヤーに対しては厚遇した。その中で最も彼が重用したのが「三賢石」と呼ばれる三人衆であつた。

三賢石には様々な特権が与えられており、彼らは国政を思いのままに動かしていた。

国民は国政に殆ど参加することなく、それでいて不満を持たなかつたのは兎に角金剛国が勝者の側であり、豊かな領土を有していたかであつた。

武器・書物は高価なものを購入することができ、能力強化や蓄財も思いのままでき、一端戦争となれば個人戦で面白いように勝利することができた。

この電腦空間でのランキングの上位はほぼこの金剛国の武將が独占していた。

こつした効率のよい国家運営をした点では三賢石は評価されていた。

軍事担当の石紅^{セキコウ}、外交担当の石蒼^{セキソウ}、人事担当の石緑^{セキリョク}、三賢石はこのように役割をそれぞれ分担し次第に組織化していった。

この組織化は第二期には軍務省・外務省・内務省として成立し、この三省制度によって金剛帝国は国家戦略を進めていくのである。

第三話『彩華の威厳』

第二期、一部のプレイヤーはゲームを盛り上げるためにも金剛の二連覇を阻止すべく動く者、対金剛を考える者も存在し、それぞれの理想を基に国を興した。

最も注目され華々しく建国デビューを果たしたのが女帝草加率いる彩華国であった。彼女は女帝ながらも猛々しく対金剛を宣言することで仕官者を獲得した。

彼女は女性ながら責任感が人一倍強く

「ゲームと言えども軍職につくものはその責任を果たさなくてはならない」

と言ったのが持論であった。

彼女もまた金剛と同じくある面で完璧主義的な部分があったかもしれないが、決して自らの理想を他者へ強要することはなかった。

この考え方は彩華国の国法として明文化され、対金剛とともに建国理念となった。

【各国の新規参入者へのメッセージ】

ゲームを盛り上げるために対金剛帝国とし、帝国の二連覇を阻止します。皆さんのお力をお貸しください。（君主：草加より）

【彩華国・国法】

・ゲームを盛り上げるために当国は対金剛帝国とし、金剛氏の二連覇を阻止します。

・ゲームと言えども軍職には一定の責任が伴います。軍職をされる方は責務を果たすよう、また辞任の場合は引継ぎをお願いします。

・皆様のリアルも大切ですが戦時には出来る限りのONをお願いします。

この国法を見た者は「たかがゲームなのに必死過ぎだ」と噂する金剛寄りの者も居たが、草加自身が君主でありながら面倒な偵察や米施し・集合役などの支援系を率先してすることから、一般の仕官者は彼女によくついていき支持した。

第四話『清濁併せ呑む』

兵力差が無ければ一騎打ちで戦う、これが電腦空間における大多数のプレイヤーの一般的な認識である。

リアルな戦争は敗北即ち死であるため必ず勝利しなくてはならない。しかしゲームにおける戦争とは一種の娯楽性であるため正々堂々と良い戦いをする事が望まれる。勝敗があるからこそゲームなのだ。

もし戦力差があるなら小国は小国同士で連合して大国に共闘を仕掛ける。これもゲームバランスの一つとしての戦略性である。それに對し大国は、不可侵（1）の破棄猶予年数をずらす、戦時中破棄不可（2）をつけると言った条約によって共闘を回避をしていく。これが外交戦略である。

第一期、金剛国の外交はほぼ完璧と言ってよいほど堅実なものであった。しかし

しかしそれを潜り抜けての共闘が金剛国に仕掛けられた。それが条約の同時破棄である。

1…『無期限相互不可侵、破棄後猶予 年』と表記される。期限付き不可侵もあるが基本は無期限であり、破棄時に失効となり猶予期間経過後に開戦可となる。

2…戦時中破棄不可：布告・受理から終戦時までを戦時中とし、その期間は条約破棄を不可とする条約。戦時中報告を国宛で入れることで有効となる。

大国である金剛国は小国である黄河国・山吹国に対して『戦時中破棄不可』の条約を締結していた。大国から小国に対する『戦時中破棄不可』の申し込みは一つの威圧感を感じさせられる。

つまり戦時中破棄不可の締結をした場合、共闘の選択肢が狭くなり

各個撃破される可能性が出てくるからである。しかしこれを拒否した場合、敵対する意志有りとされ即攻められることも出てくる。金剛は自国にとって有利な条約を他国に提案していき様子を見て、もし敵対意志ありと判断した場合は各個撃破していくことを基本戦略としていた。

これは大国ならではの戦略であり、この戦略は彼のカリスマと登用力に支えられたものであった。

外交では条約が提案され、この条約内容が即ち戦略と言ってもよい。しかし条約とはシステムの何の拘束性もなく、その実質は相互国家の信頼性に依存する。つまり条約とは信頼関係で成立するのである。

しかし金剛の外交は信頼関係を築くのは外交で色よい返事をするもののみであり、その殆どはまず威圧外交ありきであった。この部分に対しては反発するものも他国には居たが、その各個撃破戦略に恐れて誰も手を出すことができなかった。

しかしそれに抵抗した男がいた。それが戦略の天才と言われる志風^{シフウ}である。

黄河国・山吹国に対して破棄不可を取り付け金剛は油断をした。これが第一期、後の完全皇帝と呼ばれる金剛の唯一の失敗であった。戦時中破棄不可は共闘不可条約ではなく報告義務があり、静観の報告を入れてからが有効となる。つまり2国に破棄不可の相互条約があっても同時に破棄をされた場合、共闘は回避できなくなるのである。

この絶妙なタイミングでの同時破棄を提案・敢行したのが志風であった。

金剛国50名、黄河国35名/3国、山吹国30名/2国

MAP

<http://muhu.web.fc2.com/map/col1-kongou-kyoutou.htm>

【山吹国宛】

【君主】王廉オウレン「金剛国が隣接してきました。本来は隣接する前に外交をする予定でしたが私のリアルの都合で出来ませんでした。金剛国とは人数差があるのでどのように関係をとっていきましょうか。ご意見ください。」

志風「君主様、ここで即布告を受けてしまいますと当国の兵力ではとてもではないですが太刀打ちできません。そこで一時的に不可侵の提案をして、破棄猶予は相手のよい年数で決めてもらっては如何でしょう。」

王廉「志風殿、ご意見ありがとうございます。しかし相手に猶予年数を決めさせるのでは相手に都合のよいように戦略の主導権をとられてしまうのではないのでしょうか。」

志風「既に人数差によって戦略の主導権は金剛にあります。そして周辺国とも既に条約を固めていることでしょう。そこで後から結ぶ当国としては標的となる可能性が高いです。そこで相手のよい条約を締結し一時的に関係を築くのです。君主の金剛は猜疑心の強い人だと聞きますので恐らく金剛国は『戦時中破棄不可』も要求してくるでしょう。もしこの要求がきたら色よく答え一時的に結ぶしか今選ぶ道はなさそうです」

王廉「それでは属国となるような外交をしると言つのでしょうか。この国にはこの国の誇りがあります。」

志風「君主様の仰ることは御尤もです。しかし国が減びてしまつては誇りも何もありません。ここはどうか耐え忍ぶ方向でどうか。外交の任は私がお引き受けします。」

王廉「耐え忍んで将来的な展望はあるのでしょうか。もしないのでしたら属国として滅ぶよりも私は一独立国家としての滅びの道を選びます。」

志風「戦略は既に考えておりました。金剛国に隣接する国は現在の所、三国です。その三国のうちの何れかとはかなり高い確率で年数が被ります。その年数の被った国と即共闘をしかけるのです。」
王廉「確かにこの戦力差では傭兵で補えるとも思えませんが共闘するしかないですね。しかし年数が同じになる国は金剛にとって懇意な国と同期間の破棄猶予を当ててくるのではないのでしょうか。」
志風「はい、恐らく君主様の予想される通りでしょう。そこを共闘に向かわせるのは交渉次第であり、それが外交戦略です。」
王廉「わかりました。外交の全権は志風殿に委ねます。希代の戦略家と言われる貴殿の戦略手腕を存分に発揮くださいませ。」
志風「ありがとうございます。必ずやこの状況を打破してご覧にいれましょう」

【外交】

【軍師】志風「国宛失礼します。お初にお目にかかります、山吹国軍師・志風と申します。以後、お見知りおきを。本日はお話があつて参りました。外交担当の方はお見えでしょうか。」

【君主】金剛「個宛失礼。君主の金剛である。私がお話をお受け致そう。」

志風「（ふうむ、個宛外交か。こういうのは国内協議をあまりしないタイプが多い。やはり外交や国家戦略はこの金剛に集約されていると見ていいだろう）」

志風「君主様自らのご返信、大変痛み入ります。本日は弊国と良き関係を結んで頂きたく『無期限相互不可侵条約』の提案にやって参りました。」

金剛「貴国の不可侵の提案、嬉しく思うぞ。それで破棄猶予は如何程を考えておられるか。また貴国のこれからの進路などもお聞かせ願いたい。」

金剛「（共闘を狙つておるかどうか試してやる。猶予年数を聞くことで、その猶予年数が重なる周辺国とが共闘関係になるであろう。」

次の戦略のよい指標となるというものだ。」

志風「（そっちの進路を話さずにこちらの進路を言え、ときたか。）

「
志風「弊国君主のONが不安定故、まだ協議が進んでいない状態です。破棄猶予の年数はこの鯖ですと4年、12年くらいが一般的でしょうか。貴国が望まれる年数でオプションなどもございましたらお受けしたいと思います。」

金剛「（こちらが条約内容を選べとな。これはやりやすいな。ガチガチに結んでやるか。）」

金剛「うむ。では『無期限相互不可侵、破棄後猶予8年』『戦時中破棄不可』でどうであろう。」

志風「（やはり噂通りの堅実な外交。これを断ると標的とされるであろう。）」

志風「ご提案ありがとうございます。以上の内容でこちらは異存ございません。」

金剛「（即決しおったぞ。と言うことはこの男が外交権を握っているということか。しかしやりやすい男でよかったわい。）」

【山吹国宛】

志風「金剛国と条約締結。外交ログは会議室に載せておきますので皆様ご確認ください。」

志風「また本来は外交戦略は皆様と協議すべきであると思われますが、即決することで金剛の油断を誘う形をとりました。こちらに進路を取る可能性が低くなることと即開戦を避けるためです。ご了承ください。」

王廉「志風殿、外交お疲れ様です。不可侵猶予8年・破棄不可となり固く結ばれております。私は条約「同盟と考えますのでやはりこれを手のひらを返すように裏切るのは反対なのですが。」

志風「条約「同盟とは必ずしも言えないと思います。敵対する国にも一時的に条約は結びますし、共闘国と打ち合わせる場合などには

同時侵攻のためその猶予年数も合わせます。つまり条約とは戦略の手段であると言えるのです。」

王廉「それは私にも分かります。ただ不可侵のみならずともかく、破棄不可などのオプションをつけた場合、そこに強い信頼関係が発生し、それを裏切れば大義なき国とされるのではないでしょうか。」

志風「一意見としてどうぞお聞きください。確かに大義はございます、しかし金剛国の戦略は堅固な外交関係を結び、それを拒否する国は撃破していくというものです。これですと大国有利となりすぎゲームバランス的にも問題が出てきます。」

志風「大国の各個撃破vs小国連合、これが道理です。私はそうした大義の前に道理ありと思います。ただ、この国は君主様のもので、その判断は君主次第でございます。」

王廉「なるほど・・・志風殿の言われることも尤もです。それとこの国は私一人のものではございません。私の意見と志風殿の意見の重みは同等のものです。それに私は交渉の全権を全て志風殿に任せておりました、引き続き戦略の方をお願いしたいです。国民の皆様も現在の外交にご意見くださいませ。」

志風「了解しました。それでは予定通り、金剛と隣接する三国に交渉してみます。恐らくどの国も金剛の脅威を感じているはずです。」

外交関係のみを見ると大義という概念が存在するし、大義に厚過ぎれば戦略は硬直する。

志風が柔軟な戦略を組み立てることができたのはこの大義や形式に囚われるのではなく、ゲームの総体を見る視野にあった。そしてそれは道理に反しないものであったとされている。

義を重んじて潔く散っていくことで人々にメッセージを伝えるものもある。しかし志風は生きてこそ人は言葉を口にすることができなのだ、と言ったとされる記録もある。

清く・正しく・美しくと言うが、大義のみでは生きられない。清濁を併せ持つのもまた一つの器量であり、志風もまたその器の持ち主

であつた。そうしたことから志風を人々は「清濁宰相」と呼んだ。

第五話『誇り高き指揮官』

第一期、最大国家である金剛国の周辺に隣接する国は山吹国を含めて四国存在した。そしてこの四力国とも金剛国を脅威と感じていたが条約で固められていたため連合体制がとれず身動きできなかった。そこを切り崩していくのが志風の戦略であった。

引き続き志風は外交の全権を委任され、その周辺国に探りをいれつつ金剛国との関係を聞いていった。そして破棄猶予8年で同期限の国が東の黄河であることが判明した。そこで志風はここに焦点を絞り共闘の交渉を開始することにした。

黄河国は陳留・寿春・広陵の三都市を有する国で武将数は35名と山吹国とほぼ同規模の国であった。

黄河国は君主・馬翔ハシヨウが初心者のため、臣下がサポートをして発展した国である。そして戦略・戦術の両面においては元帥職シュリの朱璃シリの影響が大きくあり、誰もがその実力を認めていた。

朱璃は統率力にすぐれ常に最前線で陣頭指揮を執り、その姿を賞賛する者も多かった。黄河君主・馬翔からの信任も厚く、「元帥の言葉は我が言葉である」とさえ発言していたとする記録もある。

朱璃は謀略を好まず正攻法を主とし、正々堂々と戦うことを好む誇り高き男であったため、人々は彼を「尊厳元帥」を敬意を込めて呼んだ。

しかし一方でその誇りが一騎打ち仕様となるため、戦略を硬直させることとなる。そこを利用したのが完全皇帝・金剛であった。

金剛は朱璃の性格をよく理解しており、その誇りがあだとなるのも見抜いていた。そこが金剛の狡猾な部分でもあった。

【金剛国幹部専用チャット】 幹部のみにチャットURLが知らさ

れているパスワード付のチャット

金剛「国権を委ねられている朱璃は当国に一騎打ちを挑んでくるであろう。もし戦略を用いてきても傭兵くらいだ。しかし人数差は埋まらないだろうし、傭兵派遣先が分かれば当方も同盟国に通達して潰せばよいのだ。傭兵は撤退し、いかに戦術指揮に長けている朱璃と言えどもこの人数差には勝てまい。」

蒼石「流石は金剛様、全て先をお読みになられているんですね。くく・・・w」

金剛「利用できるものは利用すればよいのだ。誇りや尊厳などはあやつの考え、それに付き合うこともない。」

蒼石「仰る通りにございます。くくく・・・w」

【外交】

志風@山吹国【軍師】「国宛失礼します。先日は対金剛と言う方向でお話させて頂きました。本日はその具体案として金剛共闘のお話で参りました。」

朱璃@黄河国【元帥】「国宛失礼します。元帥の朱璃です。現在、国政をお預かりしている身でございますが、私自身は共闘ではなく傭兵にて戦力を補い一騎打ちで考えます。国民とも協議しますが今のところ、そのような考えでございます。」

志風「やはり朱璃殿は尊厳元帥と呼ばれるだけあり、正々堂々の真つ向勝負を挑まれる。しかしこれは用意周到な金剛の戦略によって阻止されるであろう。」

志風「（もしかしたら金剛50名vs山吹・黄河連合65名では、戦力差ができ共闘は姑息な戦略であると考えておられるのかもしれない、誇り高き朱璃殿は。しかし共闘は二国に兵力分散するため同時開戦できたとしても不利な面がある。最近の改造鯖ではそのため小国補正などの修正もある。しかし、こうした論理を並べ立てて尊厳元帥と言われる朱璃殿の心を動かすことができるであろうか。）」「志風「（この男の心を動かすのは外部からの力では無理だ。飽く迄

も内部からの自然と沸き起こる力でないといけない。ここは理屈を重ねることは返って逆効果だ。交渉とはただ論理を並べることではない。外交とは説得するのではなく、そのプレイヤーの人格と信頼に依存する。共闘戦略とは両国の足並みが揃わなければ結局失敗に終わる。我が意と同じくするものが国民に居るかどうかを期待するしかない。」

志風「元帥殿のお考え、了解しました。このような申し出をした手前、もし貴国が金剛国に布告を受けたときは当国からは傭兵にて最大限の援助をすることをお約束しましょう。」

朱璃「（この男、私が別の意見提案に対し反論もせず、更には当国の安全保障までしてくれておる。個宛外交のみの金剛国とは明らかに違い、信用できる男だ。）」

朱璃「（しかしこの国民が私についてきてくれるのは、私が正々堂々と真つ向勝負を挑むからである。この男の申し出は受けてやりたいところではあるがやはり私について来てくれるものたちを裏切ることではない。）」

朱璃「貴国のお心遣いに変感謝致します。国民一同を代表して御礼申し上げます。共闘については一度協議させて頂きますのでお待ちください。」

志風「国民の皆様方にも宜しくお伝え下さい。今後、両国が互いに繁栄・発展していけますよう努めていきたいと思えます。それでは失礼致します。」

朱璃「（何と颯爽とした男だ。この男、当国と不可侵年数が合致したので頼ってきたのであるう。しっかりとした戦略眼を持っており理屈を捏ねない。飾り気のない言葉の含み感じさせるとともに爽快感を漂わせるではないか。）」

朱璃「（この志風という男の申し出を受けてやりたい。しかし俺には俺を支持してくれる国民がいるのだ。）」

【黄河国宛】

朱璃「皆さん、先ほど山吹国から外交がありました。ログは会議室にあるので参照ください。共闘か傭兵か、どちらの戦略をとるべきかご意見ください。」

国民の意見の大半は傭兵による戦力補強で一騎打ちであった。しかしこれは国民が朱璃の性格を察してのことであり、朱璃が国民を思うのと同じように国民もまた朱璃の考えをよくわかっていた。そして朱璃は自分の人格によって国民が意見を述べていることに気がついていた。

朱璃「（結局、自分の考え方によって国民を判断させてしまうことになっているのではないか。）」

朱璃「（もしそうであるなら、俺のしていることは金剛の独断政治と同じことになるのではないであろうか。）」

よく支持されることは意見性を失わせることにもなる。朱璃もまた金剛とは違うタイプのカリスマであった。

しかしこの局面は一人の老人によって新たな展開を迎えることとなるのである。

第六話『老師の引導』

【在野：郭明宅】

茂宮^{モキユウ}「戦略の天才と戦術の天才が遂に顔を見合わせたようですね

町で噂になっておりまする もきゅ もきゅ ー

郭明^{カクメイ}「ふおおふおおw一方は特に戦略を得意としておる、もう一方は戦略を自らの誇りによって硬直させておるが戦術は得意とする。」

郭明「戦略と戦術は両輪のようなもんじゃwどちらから欠けてもダメじゃのう」

郭明「志風は戦略では金剛に勝るが戦術では劣る、朱璃は戦術では金剛に勝るが戦略では劣るのじゃ」

茂宮「ふみゅふみゅ、なるほど では二人が手を結べばあの完全皇帝を凌ぐってことなんですね もきゅ もきゅ ー

郭明「まあ、そういうことじゃw天はこの電腦空間に面白い若者をお与えなされた。金剛・志風・朱璃、この若き天才達の活躍を見にいきたくなつたわいw」

茂宮「老師様は昔、偉い君主様だったんでしょ？私の両親や村の人たちはそう噂してます もきゅ もきゅ ー

郭明「さあてなw昔のことは忘れてのう。最近物忘れがひどうてw歳というものは困ったもんじゃてwふおおふおおw」

【人物紹介】

郭明^{カクメイ}、年齢や出自は不明。既に電腦空間の争いから身を退いており在野に隠居中である。公式記録にはないが名前を幾度も変えて君主・軍職を歴任したらしい。知る人ぞ知る在野の士であり、お忍びで各国の幹部クラスの人間も尋ねてくると言う。別名『暁の老賢帝』とも呼ばれる。

茂宮^{モキユウ}、郭明の世話をしている。茂宮の父は郭明に仕えていたらしくその恩義で子供を世話役につけている。茂宮は郭明の世話をしつつ

も郭明から読み書きを習っている。

【在野：郭明宅】

郭明「老人の気まぐれって奴かいのうwちよっくらいってくるわいw」

茂宮「各国の幹部がお忍びで老師様に会いに来ると言うのに、老師様自ら出向くなんて やっぱあの二人は噂通り本物の天才なんですね もきゅ もきゅ」

郭明「完全皇帝・金剛、清濁宰相・志風、尊厳元帥・朱璃、この三人の天才がどう動くか。まさに三国志じゃ！」

茂宮「茂宮もいきますもきゅ」 連れって言ってくださいよー、老師様」

郭明「茂宮はまだはやいのう。後一期・二期くらいすれば成人するのでそれまで我慢じゃw留守の間はお母さんのお手伝いをきちんとして、勉強も忘れるじゃないぞよw」

茂宮「ちえ、つまんないの」お留守番か」

郭明「茂宮はよいこじゃ、よいこじゃwふおふおw」

郭明が黄河国に仕官しました。

志風「（あの知恵の老人が黄河国に仕官されたか。我が戦略の意を理解してくれるのはあの老人の他はないであろう。）」

【黄河国宛】

郭明「おーい！士官したぞー！宜しく頼むじゃ！朱璃はおらぬか」wおるなら返事せーいw」

馬翔【君主】「郭明殿、宜しく願います^^（なんだ、この爺様はw元帥に向かって馴れ馴れしいぞ）」

朱璃【元帥】「これはお久しぶりでございます、郭明老師。相変わらずお元気そうで。隠居したと聞いておりましたが士官して頂けると

は有難い限りでございます。」

郭明「こりゃ、人を老人扱いするでない」wまだまだ若いもんには負けんぞ」

朱璃「そ、そうですか^^;それではどうぞ宜しくお願いします。まずはまったりしてください。」

郭明「そもまったりできる状況でもないかもしれぬぞ。会議室の内容は大方読ませてもらった。仕官していきなり意見を言わせてもらうと、ここは即座に共闘に踏み切るべきではないであろうかと思うのじゃが」

馬翔「（中途仕官のくせにこの爺さん、この国のことをわかっておらんぞw清廉潔白な元帥が共闘など承諾するはずがない」

朱璃「功名なる郭明老師のご意見、有難く参考にさせて頂きたいです。私は戦略が不得手故、できればいずれかの軍職について頂きたい思います。」

朱璃「国民の皆様にもご紹介致します。この方は私が初心者のお世話になった方であつて老賢帝と呼ばれていた名将でございます。そこで先生の意を込めて老師と呼んでおり、この方を推薦する次第です」

朱璃「そして私は初期仕官も中途仕官でもこの国を盛り立て頂ける優秀な方なら意見や軍職に就いて頂いて構わないと思います。」

郭明「（こやつ、面倒なことを押し付けてくれるわいwそれにしてもこの国は朱璃の人望によって持っているようじゃな。そこで朱璃はわしを立てることでわしの意見を浸透させようとしておる。）」

郭明「（つまり朱璃自身、一対一か共闘かで迷っておるということじゃな。しかしわしを立てることとわしの意見を通させると言うことは結局、個人の人格によって政治が動くこととなる。それではいいんじゃない。」

郭明「（国というものは上から下までがよく戦略を理解せねばならない。戦略を個人の人格のみに委ねてはならないのじゃ。」

郭明「なぜ共闘戦略をとるのか少し説明しようかのう。まず テス

ト（１）の時点で金剛は朱璃殿の性格を見抜いておる。」

１…第一期より前のテスト期。公式には電腦紀元前と記録されている。ゲームバランスやサーバーの負荷の確認が行われる。

郭明「金剛は朱璃殿、おぬしの誇りを逆手にとって各個撃破をしてくるじゃろう。そしてあの金剛のことじゃ、既に外交によってガチガチに固めて戦略的に先手を打っているに違いない。」

朱璃「ううむ・・・」

郭明「つまり金剛が戦略で先手を取ろうとしている現在、朱璃殿は後手で戦術的に挽回しようとする構図となり、これは困難なことじゃ。」

郭明「さてと、時間はないぞい。情報漏洩（２）があつた場合、金剛はすぐに各個撃破にくるであろう。そうなると戦時中破棄不可によつて参戦不可になってしまうぞい。同盟同士で助け合うのも一つの大義じゃて。」

２…スパイによつて情報が他国に漏れること。スパイ行為は鯖によつて禁止されているところもあるが、一般的には禁止の明文化はされていない。しかしスパイ行為が判明した場合、多くのプレイヤーから不評を買うこととなる。

朱璃「分かりました、老師。君主、共闘についてはこちらから山吹国へ再提案して宜しいでしょうか。」

馬翔【君主】「はい、宜しくお願いします」

このような経緯で電腦歴８６年１月、遂に黄河・山吹連合による同時破棄が決行されることとなったのである。

第七話『神々の鼓動』

志風の優れた戦略的思考は彼の資質でもあったが、物事を順序立てて処理していく論理力を根本にしていた。

郭明はこの志風の戦略をほぼ直観とも言えるような形でそれを把握した。それは数々の修羅場を潜り抜けてきた老将としての経験則から導き出されたものであった。

戦略とは地形・戦力・人脈など様々な要素や数値を考慮して理路整然と順序よく組み立てていくものであるが、志風が天才と言われるのはこれを誰よりも正確にこなすからである。

そしてこれを直観にて把握した郭明もまた人物を言えよう。

しかし郭明は決して論理性を否定する考えは持っていなかった。経験した者にとって言葉は不要であるが、経験無き者には言葉は有用であるからである。

経験無き者を導くのに直観を用いれば一つの信仰のような形になってしまう。それをこの老人は嫌ったのであった。

朱璃「老師はなぜそのように他者の思考が手に取るようにわかるのでしょうか。」

郭明「それは経験の差じゃよ。逆に経験無きことはわたしにはわからない。」

郭明「しかしこの電脳空間には稀に天才と呼ばれる者が存在する。彼らは経験せずとも無から有を作り出すことができる。まあこうやって見物するのは良い老後の娯楽じゃてのう。」

郭明「若さとは素晴らしいのう。新たなことに挑戦するエネルギーが若さじゃ。逆にわたしは過去の経験によってしか物事を見ることはできない。それがわしの限界じゃ。しかし朱璃、おぬしには未来を切り開く力がある。わたしをもっと楽しませてくれい。ふおふおふ

おふおw
「

このような経験則から来る直観は普通のプレイヤーからすると一種の予言のようにも思え、この不思議な老人を人々は預言者とも呼んだ。

この預言者という言葉には人々のメシア思想が投影されているのかもしれない。時代はいつも救世主を必要としているのである。しかし郭明はこうした預言者・救世主と言う言葉を嫌い、そのことからキャラ名を幾度も変更し最後は在野に身を隠したのである。

郭明「経験則に基づけばまず答えが見えてくる。そして論理は後からついてくるのじゃ。わしの限界はその論理が後に分かってても言葉を持たなかったことじゃのう。」

郭明「そうした自らの考えを客観的に分析し表現することができるようになったのはここ最近じゃ。」

人は神格化されることはあっても決して神にはなれない。それがこの老人の言わんとするところであろうか。そしてその神格化も郭明の嫌うところであった。

郭明「朱璃よ、おぬしは自らのカリスマによって人を率いておる。これはおぬしの天賦の才でもあるのだが、それは苦難の道でもあるのじゃ。」

郭明「わしはそれから逃避して在野に身を隠した。しかしおぬしにはそうなって欲しくないのう。でないとまずわしが楽しみが減るわい。ふおふおふおw」

一方、自らを神格化していったのが完全皇帝・金剛であろう。

完全皇帝と言う称号については人々が金剛の戦略性の高さを評価したものであると電腦記録にはあるが、自らが名乗ったとする説もあ

る。

そしてこの「完全」の意味とは「神」の概念化でもあったとも言われている。

その証拠に第一期の金剛の発言は極普通のものであったが、第二期になると「余は神託を受けた」「神は余にこのように告げた」とするログがいくつか確認できる。これは金剛の心境の変化を物語ると見る研究家もいた。

郭明「人は神になったらどうじゃろなあ。恐らく孤独じゃろつて。わしは預言者と言われ多くの臣下に祭られていた頃よりも、在野の老いばれとして人々と接していた時の方が暖かさを感じたのう。」

郭明「孤独に耐えるのがリーダーの務めであるなら、この世はなんと寒いことであろうか。孤独な神とならず人を率いていくには人を信者とするのではなく、友とせねばならぬのう。」

朱璃「（友・・・か。）」

郭明「（わしはそれに気づくのに遅すぎた。在野に逃避してようやくわかったことじゃのう）」

郭明「歳をとるとどうも口数が多くなり説教臭くなるのう。ふおふおふおw」

神格化を拒むもの、自らを神格化するもの、そしてそこで葛藤するもの、様々な歴史精神が電脳空間で動き出した。

こうした黎明期に活躍した将星の多くは、本人たちの意思とは関わらず後世の人々によって神格化されていた。

その将星たちの実像を捉えているのは僅かな記録とそこに生きた人々の記憶にしかない。

第八話『竜虎対決』（前書き）

第八話『竜虎対決』

時は遡り電脳紀元前56年、テスト期と呼ばれる時期、既に時代はラス2（1）まで突入しており凄まじい激戦が行われていた。

1：ラス2「ラスト2国

【MAP】

<http://muhu.web.fc2.com/map/bt.last.htm>

金剛国266名vs長江国234名、後に『竜虎の戦い』と言われる名勝負であった。

金剛国は三賢石を補佐として例の如く金剛が指揮を振るっており、兎に角数で押す力攻めであった。

それに対する長江国の指揮官は尊厳元帥・朱璃であり、寡兵でありながら一歩も退くことはなかった。

朱璃の戦術は天性のものであり、そのON指示は見事なものであった。

南北に分かれるラスの場合、侵攻ルートは3つとなる。それを金剛はバランス配置をし、攻守の安定を狙った。

それに対して朱璃は東を本体として朱璃自ら率い、中央を守備部隊、東を陽動部隊として臨機応変に攻め立てた。

【長江会議室】

東進部隊：廬江（本部隊）100名

中央部隊：襄陽（守備）80名

西進部隊：漢中（陽動）50名

？OFF一斉は本部隊からを基本とし、細かいON一斉を陽動部隊

から行い攪乱します。

？中央に一斉がきた場合はON対応で凌ぎます。また中央が薄い場合はON攻撃も行っていきます。

？本部隊のOFF一斉が上手くいかない場合は西進部隊にONを集中させ進軍していきます。

金剛は東部に維持が困難な領土があり、ここをカウンター対処とするためにも本体を東部に置いた。

人数差があることから通常の指揮官であるならこれを予想して本体を中央・西部のいずれかに置き、戦略的攪乱を狙っていくのであるが朱璃はこれを真つ向勝負で受けたのである。

これは朱璃の度量にもあるのであるが、拠点勝負の正攻法はこの男の得意とする部分でもあった。

開戦は両者一斉攻撃で始まった。OFF一斉は単純計算だと人数が勝る方に軍配が上がる。当然のことながら長江国東部の拠点である廬江はかなり押されることとなる。

ここで怖気づく指揮官であればON全軍廬江守備を命じるのであるが、朱璃は冷静に一言、中央守備部隊のONのみを廬江守備とした。

第九話『鳳凰の両翼』

中央部隊も攻撃が来ていたがここは鉄壁將軍・夏侯瑜カコウユが部隊長を務めており、兵種から守備枚数、徴兵数及び仁官配置など無駄がなく鉄壁の布陣を敷いていた。

彼が鉄壁と称されるのは、その部隊所属の把握にあるだけでなく全軍からの戦局のバランスを正確に判断できることであつた。

夏侯瑜「私が鉄壁と言われる理由は全て計算にある。全体の戦局を崩さない部隊配属で守備をすればよく、悪戯に守備枚数を増やし闇雲に守備をするものではないのだ。」

夏侯瑜「全ての連携こそが守備の基本であり、連携なくして単独の守備はない。兵スペック・人数・城壁値はたしかに重要だがそれに頼るようではいけない。」

この電腦空間の仕様は攻撃有利である。夏侯瑜の言わんとするところは、徹底守備に回ってしまうことは敵に攻勢を許してしまうことであり、こちらの攻撃要員を割くことは返って自らの危険要素を作ってしまうことになる、ということである。

つまり最低限度の守備枚数が把握できればあとは攻撃要員に回すことができ、攻撃することが最大の防御でもあるとも換言できる。

ここは朱璃の度量と夏侯瑜の計算がかみ合つて出来る共同作業であり、夏侯瑜が鉄壁を名乗れるのも朱璃と言う指揮官が存在するからであつた。

また朱璃も細かい指示をださず中央からON守備とするのは、夏侯瑜がどれだけONを割くかを計算することを見越してのことであり、朱璃もまた夏侯瑜に絶大な信頼を寄せていた。

そして一方でON攻撃陽動を仕掛けるのは神速將軍・遊鈴であつた。

遊鈴は敵の守備が薄い部分を素早く突き、そこを陥落させ打通させる戦術を得意としており、その恐るべき進軍の早さを人々は『神速』と賞賛した。

遊鈴「男は度胸！思い立ったら即行動よう！がっちり気合で上げてやる！」

夏侯瑜「遊鈴、無計画な行動は慎めよ。時々、お前の行動は無謀とも思えることもある。」

遊鈴「おお、夏侯瑜、わりいわりい。いつもお前が守備しながら偵察して情報提供してくれてるもんなwお陰で俺の武勲はばっちりだぜw」

夏侯瑜「私はお前に武勲を立てさせてやるために情報提供しているわけじゃない。そこを勘違いしないでくれよな。」

遊鈴「また夏侯瑜の説教が始まったなあwお前は守備も堅いが性格も硬いぜwちよつと面白い偵察情報があるから突付きたくなるんだよなw」

夏侯瑜「お前こそ攻撃は速いが女に手を出すのも早いよなwwwこの前A女子とB女子がお前のことを噂してたぞww」

遊鈴「うへwwwばれてたのかwwてか、そんな情報収集はせんでいいぞww夏侯瑜」

夏侯瑜「とりあえず、攻撃は全体の戦局を考えることだ。それによつて私の部隊がお前の部隊の尻拭いをしないとイケなくなる。」

遊鈴「へいへいwwわかったよwでこれから情報収集は頼むぜwこの手の細かい作業が俺は苦手なんだなw」

遊鈴の神速は夏侯瑜の情報収集に多くを依存していた。しかしこの情報分析を直感的にこなす遊鈴もまた名将であり、肝もよく座っていた。

朱璃が思い切った度胸と冷静な判断力といった両極を兼ね備えていたと言うのは、この夏侯瑜・遊鈴の両将を有していたからであると

分析する研究家もいた。

朱璃は拠点対決の正攻法を得意としており、ルートが3つある場合は一つは守備、もう一方は陽動攻撃とする戦術をよく用いた。この守備を鉄壁将軍・夏侯瑜、攻撃を神速将軍・遊鈴が請け負った。

運命や宿命やと言うものがあるのであるのか、彼はよく寡兵で大軍に立ち向かう状況が多々あった。そして幾度となく押され苦境に落ちることも暫しであった。

しかし彼はそこから何度も這い上がり戦術的な挽回を見せた。このことから朱璃を不死鳥・鳳凰の化身と見るものもあり、それを羽ばたかせている原動力が夏侯瑜・遊鈴であるため、この二将は『鳳凰の両翼』とも呼ばれた。

テストラスではまさにこのような状況となりつつあった。

第十話『完全神話の崩壊』

金剛「よし、押せ！押すのだ！全軍廬江へ突撃せよ！」

石紅「ひゃひゃひゃ！廬江は確実に守備枚数が減っており、城壁到達まで後僅かでございますねw」

この電腦空間の仕様は守備が剥がれると城壁への攻撃、つまり攻城戦へと移行する。そしてその城壁値がゼロとなった時点で都市は陥落する。今、廬江がその危機に瀕している状態であった。

【長江国・国宛】

朱璃「中央部隊の守備系兵種は部隊移動にて廬江守備へ。敵都市の新野・長安ではどちらが守備が薄いか情報のあるものは提示してください。」

夏侯瑜「長安が現在は手薄です。情報は会議室に貼り付けておきました」

朱璃「よしわかった。江夏カウンターは不要、後方に打通されても無視でカウンター要員は西部遊鈴部隊へ移動を。」

朱璃「西部からは長安にONでいけるものから波状攻撃を。西部の守備は現在OFFの者にまかせ出兵コマンドを入力してください。」

朱璃「（やや戦況は苦しいな。しかしここで退いては負けだ。長安を狙って相手がON対応してこない場合は、長安からON攪乱でいいくしかない。最短で中央部を狙えば勝機もあるやもしれぬ。）」

【金剛国・国宛】

石紅「金剛様、長安に攻撃が来ております。このまま廬江への攻撃は続行でしょうか、それともONで対応しましょうか？」

金剛「むう、ON・OFF込みの勝負なら数の多い我らが確実に勝つ。しかし長江の奴らはON勝負でくるのであろう。それなら一端

膠着状態にしてからまた総力戦をした方がよいと考える。」

金剛「ONは一部、長安の守備に回れ！長安が落ち着いたら再び廬江を攻撃すればよい！」

【長江国・国宛】

国民「元帥、長安の守備が増えました。対応されてしまったようです。」

朱璃「いや、これでよい。そのまま長安の攻撃を続行せよ。廬江の守備は安定するはずである。守備が安定したらONは長安優先に攻撃せよ。OFFはまた元の部隊配置につよくように。」

朱璃「6時間後の55年5月から合肥へOFF一斉！コマンドは「徴兵（4月）＞出兵＞出兵」と入力を！ここで一気に攻勢にでるぞ！」

金剛「ううむ、朱璃め、長安にONを増やしておるなwならばこちらこそこちらにONを対応させて潰すまでよw」

遊鈴「朱璃の兄貴、なんかやたらこつちへの攻撃がきつくなってきましたぜ。俺は守備苦手なんでね。」

朱璃「遊鈴ここは我慢のしどころだ。そっちが先に崩れるとこちらが一斉で抜いたとしても進軍のスピードで負ける。」

夏侯瑜「そうだぞ、遊鈴。お前は大体、我慢が足りないんだwこの前だつて作戦会議を抜け出して女の所へ行つてただらうwたまには我慢くらいしろよなーw」

遊鈴「へいへい、わかったよ。なんか戦況も俺への対応も厳しいなw」

このように言いつつも遊鈴の行動は素早かった。長安への攻撃から一部ONは街亭への遊撃に切り替えることで劣勢でありつつも士気を保つ要素を作りつつ、OFFは守備系兵種へと変更させていた。

そして戦線は一時膠着し、55年5月の合肥一斉の2ターン前まできた。

朱璃「ONは3月徴兵、4月守備を。5・6月攻撃をお願いします。これはOFF出兵が空出兵にならないようにするためなのでONはご協力ください。」

この電腦空間の仕様は先頭の守備から戦闘が行われていく。つまり基本コマンドをOFF守備しから一斉攻撃とする場合、守備つきからのOFF入力となる場合があるので、ONはそれを保護するように1ターン前に一斉守備を入れるのである。

このOFF攻撃とON守備の連動があつてこそ強力な一斉攻撃となり得るのである。そしてその一斉攻撃が今決まろうとしている。

石紅「今度は合肥に攻撃がきているようです！この枚数は一斉攻撃かもしれません。」

金剛「ええい、小癪な！ではONを今度は合肥に対応させればよいことだ！」

石紅「この入力数は半端ではないです。次のターン持たないかもしれません。これは恐らく漢中からONは撤退していると思われますので、こちらのONはそのまま長安に残して漢中攻略でどうでしょうか」

金剛「もうよい！お前の判断に任す！」

石紅「はは〜！」

金剛国がこの一斉に気づいたのは1ターン目の15分程であり、その頃には合肥守備のほぼ半数が壊滅状態になっていた。

そして一気にONを含めたOFF一斉攻撃によって2ターン目前半10分で守備が剥がれ、3ターン目の残存兵とON増加による波状攻撃で合肥陥落となつたのである。

しかし金剛国も負けておらずその1ターン後にON攻撃によって漢中を落としている。だが戦略的価値としては漢中よりも合肥の方が大きく、また戦術よりも戦略を得意とする金剛にとつての精神的ダメージも大きかった。

この時、金剛は「一斉攻撃さえ分かつておれば」と呟いたと言う。この一言は三賢石の人事担当・石黄の個人記録『黄書秘録』に残されており、この時期以降、金剛がスパイを使い出したと記されており、この文書は彼の死後まで公表されることはなかった。

完全皇帝・金剛の戦略は常に彼の戦力差や物量差による総力戦であり、これを見事に看破したのが尊厳元帥・朱璃であった。これが後年、金剛のトラウマとなり、朱璃の戦術指揮を恐れることとなったと『黄書秘録』から研究家は解析した。

金剛は確かに偉才の持ち主であった。もしかしたら朱璃と言う戦術の天才が出現しなかったら彼は完全皇帝としてのプレイヤー人生を全うできたかも知れない。

また彼が己の才能と比較して相手の才能も認めれる精神性を有しているならば、彼のプレイスタイルにも変化はなかったのかもしれない。

一対一で正々堂々と勝負していく精錬潔白の士である朱璃が、金剛と言うカリスマの心を歪めてしまったのは皮肉なことである。

第二期・金剛は朱璃の尊厳を十分に利用したように見えたが、実はこれは彼の心の弱さの現われであったのかもしれない。

第十一話『預言者の対峙』

電腦紀元前56年一月、金剛と朱璃と言う二つの将星が激突した。このラス2戦、即ち『竜虎の戦い』である。

一方でそれを在野にて傍観する者たちもいた。

【在野】

茂宮「きのこ、ゼンマイ、木の実でしょ、たくさん取れましたもきゅ もきゅ」

郭明「後は川魚がわしは欲しいのうw」

茂宮「じゃあ、帰りに市場を見ていきますか？どうせお酒の肴なんでしょ、老師様」最近、お酒の量が増えましたよ、お体には気をつけてくださいね」

郭明「茂宮も一人前に説教するようになったかわい、こりやまいつたのお、ふおふおふおw」

茂宮「いつまでも子供じゃないんですからね、私も」もきゅ、もきゅ」

郭明「後2期もすればお前も元服かのう。まだ日暮れにまで十分時間があるので釣りでもしつつ戦でも見物するかのうw」

茂宮「はい、今日の授業は釣りと兵法のお勉強ですね もきゅ、もきゅ」

郭明「矢が飛んできたら大変じゃて、もうちと上流の方にいくかのうwあの辺りがよさそうじゃw」

茂宮「あれ、誰か居ますよ。もきゅ」

郭明「お若いのも釣りですかのおwお隣ですが同席しても宜しいかのうw」

若者「この山河は誰のものでもないのをご自由にどうぞ。自然の前では君主・軍師の官職もありませんし所有権もないでしょう。」

茂宮「なんですか、この人。老師様に向かって偉そうに！老師

様はねー、老師様はねー偉い・・・」

郭明「よいよい、茂宮よwそうそうわしは偉い、じゃないエロイただの爺じゃてw」

若者「これは私が悪かった、謝ろう、お嬢ちゃん。ただこの電腦空間ではリアルの年齢・地位なんかはあまり関係ないって言いたかっただけなんだ。」

茂宮「私はお嬢ちゃんじゃない、それでも男です！グラ変更しようかな」wそれに茂宮って名前がついてるもん！もうすぐ元服だぞー！もきゅー！」

若者「ああ、そうなのか。じゃあ、茂宮君、宜しくw」

茂宮「おじちゃんこそ、どっか仕官すりゃいいのに何でお昼過ぎから釣りなんかしてるんですか」。もきゅ」

若者「私はまだ未婚だからお兄さんと呼んで欲しいなあ」wまあ、あれだ。今流行り(？)のニートみたいなもんさ。特に仕官する気も仕官先もないが食うのに困ったら仕官もしてみるかなw」

郭明「茂宮や釣りをせねば日が暮れてしまふぞいwわしの酒の肴がw」

茂宮「はいはい、老師様。もきゅ」

郭明はその若者に一種のオーラのようなものを感じた。それは郭明が幾度もの修羅場を抜けてきた武将としての勘であった。

若者「戦局を見るにはここはもってこいの場所ですね。ご老体はどこかで戦争屋をされておられたのですか？」

郭明「いやあ、わかりますかい、遠い昔のことですわい。今は見ての通りただの老いばれですじゃ。と言いますとお若いのも以前は何処かに仕官されておられたんでしょうなあ。」

若者「はい、かなり放置官していて最後には解雇を食らってこの有様ですw」

郭明「それにしても大した觀察眼をしておられる。」

若者「たいしたことありませんよ。ここは調度、攻撃範囲外で、それでいて地形の全体を見渡すにはもってこいの場所。偵察にも調度よいでしょう。」

若者「それにご老体のその釣竿に握り方は釣り人のものじゃない。」

茂宮「あつたりー！おじちゃん、頭いいですねー！お礼にさつき取ってきたばかりのきのこあげます、もきゅ」

若者「やっぱりおじちゃんなのかあ、私はwまいったね。美味しいそうなきのこだね、今夜の鍋のおかずにするよ。」

郭明が戦を目の当たりにして無意識に竿の持ち方を変える癖をこの若者は見抜いていた。

偵察場所による判断は一部将の能力で十分推察できそうであるが、このような癖を一瞬で見抜くタイプには老将郭明は恐ろしさを感じた。これも郭明の経験則からくる勘であった。

戦争では指揮官の癖を把握することが重要である。これによって戦略・戦術も多少違ってくる。これは用兵学の分野ではなく心理面なのかもしれない。

郭明「（城を攻め立てる将は恐ろしくない。槍や矢などものの数ではない。しかし心理を突く将には注意が必要である。）」

郭明「（無敗の朱璃を倒すとすれば、こう言うタイプの男であろうなあ。しかしなぜこのような人物が在野におるのかのう。）」

郭明「茂宮よ、よく見ておくのじゃ。あれがこの電腦空間でのラス2と呼ばれる戦いじゃ。しかも金剛国の金剛、長江国の朱璃、共に数十クールCOOLに一度出るか出ないかの名将じゃ。」

茂宮「凄いい一斉の殴り合いですね、長江国は廬江が先に押され気味のところを長安攻撃で盛り返してますね。もきゅ」

郭明「さあ、茂宮よ、ここからどう展開すると思うか言ってみなさ

い。これが今日の課題じゃ。」

茂宮「廬江と長安を領土交換のような形でこのまま抜いていくんじゃないですかー、もきゅ」

郭明「うむ、普通の将ならそれでよい。しかし戦略・戦術はその将の技量もしくはその将の思想・心理によって変化するのじゃ。」

郭明「この朱璃の長安攻めは城を攻めているのではなく金剛の心を攻めておるのじゃ。それが分からぬと展開は見えぬのう。」

茂宮「城を攻めているのに心なんですかー、難しいなあ、戦争つてもきゅ」

郭明「若いのはどう思われるかのう？」

若者「合肥と漢中の領土交換つてとこでしょうな。」

郭明「見事wまさに狙いはそこにあるじやろう。」

経験ある者同士には理屈はいらない。その一言で全ての含みを理解し合えるのが経験者である。

しかしこの若者は更に郭明老人よりも先の展開までも予想していた。

若者「55年5月から合肥一斉にて3ターンほどで陥落、その後すぐに漢中が陥落、その後は乱戦にて暫く膠着と言つところですね。」

郭明「（何と！この者、一斉と陥落まで予測すると言つか。）」

郭明「なぜそこで一斉があると分かりますかの。」

若者「周期ですね。長江国の今までのログからして一斉で一番効果を上げているのは約6時間周期の一斉。そして元帥・朱璃もその時間を既に把握していることからその日時が割り出されます。」

郭明「なるほど。その可能性は十分ありそうですね。若いのに素晴らしい洞察力をお持ちですのう。いやあ、この電腦空間の将来も安泰ですわい。ふおおおお」

郭明「さあてと、そろそろ日が暮れますの。魚は取れたし夜の晩酌が楽しみじゃわいw見かけぬ顔じゃが旅人ですかの、旅路にはお気をつけなされ。」

若者「一応、武術の心得はございますので困るのは銭が尽きることくらいですかね。ご老体もお元気で。ではまたどこかでお会いしましたら。」

(トコトコトコ・・・)

茂宮「あの何者なんでしょうね、老師様に説法みたいなこととして「釈迦に説法」って言葉を知らないんでしょうかね。もきゅ」

郭明「いやあ、あの相からして王補の才を持つ者かもしれないわ。あのような者がまだ在野にいたとは。今日は楽しい日であつたわいwふおおふおおw」

茂宮「老師様と同じ意見だったのは私も驚きです。けど日時まで予測するなんて、本当に当たるんでしょうかね。もきゅ」

そしてこの若者が言ったように電腦紀元前55年8月長江国は合肥を攻略、そのすぐ後に金剛国が漢中を陥落させることとなる。

この拠点レベルでの戦略的価値は合肥の方が上であり、戦略で常に先手を取ってきた金剛に大きな精神的ダメージを与えることとなる。それによって金剛はそれ以降、思い切った攻勢で出れず戦況は膠着化していった。

こうした心理面もこの若者の予測の通りであつたことは更に郭明老人を驚かせた。

と言つても人数差に開きがあり、無難に攻め立てた金剛が領土的にはやや優勢でありつつも、テスト期は決着がつかないまま幕を閉じた。

この時期が電腦歴元年であり紀元後とされている。

この若者と老人の会話録は後年、茂宮が文書として残しており、テストラスの『竜虎の戦い』に対して、在野での『預言者の対峙』として述べられている。

この若き預言者の名を亜沙羅アサラと言った。後に亜沙羅は、尊厳元帥・朱璃に初めて土をつけることとなり、その恐るべき用兵振りから軍神將軍と言われた。

朱璃を撃破した者がこの時出会った若者であったことは老人郭明の生涯で最大の驚愕であり、「なぜ自分はこの時、彼の名前を聞かなかったのか」と悔やんだと言う。

第十二話『獅子奮迅』

テストラス2は数で勝る金剛国がやや優勢ではあったが結局勝負がつかず、テスト期の終了を迎えた。

人々は寡兵であるにも関わらずその金剛国の猛攻を凌ぎきった長江国の指揮官・朱璃を賞賛した。

この朱璃のON指揮は凄まじいものがあり、金剛優勢とは言え幾度かの局面では金剛の心胆を寒からしめた。

形勢では金剛が優勢だが、心理上では朱璃が勝る、この竜虎の戦いはそのように後の人は評価したのであった。

しかし朱璃も無傷ではなかった。

戦略レベルでの不利を戦術レベルでのON指揮で補った訳であるが、それは戦術レベルでの過度の支えを必要とし、その殆どが朱璃自身に降りかかってきた。

陣頭でのON指揮・会議室でのOFF指揮・職回し・部隊長の任務・拠点戦略の修正などの激務を全てこなしたため、その過労によつて数度、戦中に昏倒をした。

呂栖「元帥、ここは我々に任せて暫く休養をおとり下さい。このままではお体が持ちますまい。」

朱璃「ここで私が退けば、これまで私についてきてくれた者に示しがつかぬ。そして地獄で待っている散つていったものたちにどのような面を下げていけようか。」

呂栖「しかしこのままでは命にも関わります。どうか養生を。」

朱璃「寝所で死すのは武人の恥、陣中で死すならば本望である。」

この朱璃の言葉を聞いてもはや誰も止める者はいなかった。その言葉には彼の不退転の決意が滲み出ており、それを成させようとする

支えは気力のみであり、その根源は尊厳にあった。

既に朱璃の体力は限界を超えていた。しかしその覇気は一向に衰えることを知らず、その采配は常に正確であった。この超人的とも思える理性の強さに諸将はますます彼を崇拜していくこととなり、彼等もまたよく戦った。

遊鈴「朱璃の兄貴、あんなだとマジでくたばっちまうぜ。死んだら女も抱けやしないw」

夏侯瑜「遊鈴、お前なあ、戦争中くらい女は忘れないのかw」

遊鈴「古人に習い『君がため 捨つる命は惜しまねど』とか詠むと俺もカッコイかなw」

夏侯瑜「お前は全体的に真剣味が感じられんからなあw」

遊鈴「戦争なんざあ、真面目にするもんかねえ。俺にしてみりゃ、女を口説き落とすのと城を攻め落とすのは同じことなんだがねww」

夏侯瑜「お前は全てのことをゲームと割り切りすぎだ。朱璃ほどはやりすぎだがもう少し理念とか哲学とかそうしたものを持つたらどうだw」

遊鈴「哲学は哲学者に任せばいいのさ。俺は女を専門とさせてもらうぜw」

夏侯瑜「一般武将ならまだしも、お前は一小隊長だぞ。それでは下の者に示しがつくまい。」

遊鈴「女性は男性にとって永遠の神秘なのだw俺はその神秘に立ち向かおうとしている！これが俺の哲学だ。これでいいだろ？ww戦争には関係ないって突っ込みはなしだぜw」

夏侯瑜「あのかなあ」

遊鈴「しかし朱璃兄は勿体ないなあ。あんなにイケメンなのによ」。本気になれば夜の方の武勲も凄いと思うぜーw」

夏侯瑜「真面目な話、今ここで朱璃が倒れると戦線維持が不可能となりこの国は終わる。」

遊鈴「確かにそうだな。前線の崩壊は即滅亡だ、兄貴の奮戦あつて

こそ何とかギリギリで保っているのが現状。」

夏侯瑜「そう言うことだ。敵のONの少ない時や守備の薄い部分へ絶妙な一撃を行えるのは朱璃のON指揮以外には不可能だ。」

遊鈴「俺もONによつての奇襲戦術は得意としているが、兄貴のすげーのは全体の守備バランスを崩さずやるところだな。あの妙術とも言える芸当はともじゃねーけど真似できないぜw」

夏侯瑜「所詮、俺たち二人は小隊レベルでの視野しか持っていない。しかし朱璃は国単位での視野とそれを動かす力を持っている。それが俺たちとは違うところだ。」

遊鈴「俺が戦争屋として尊敬できるのは兄貴だけだなーw」

夏侯瑜「しかし問題はその一人が欠けてしまうと、その国の軍事が機能しない、もしくは著しく軍略レベルが低下することだ。」

朱璃のON指示のプレッシャーによつて金剛国は攻勢に出れなかった。

攻勢に出る場合、必ずどこかに隙ができることとなる。その隙を一瞬で突くところが、朱璃が天才と言われる所以である。

しかしこの隙の判断材料は夏侯瑜による情報収集能力と遊鈴による遊撃・打通技術があつてこそであり、この三人の連携によつて成されるものであつた。

このように三位一体の連携があるのだが、攻撃して都市陥落の武勲が一番多いのは遊鈴となる。

この電腦空間の戦争で一般武将が一番楽しむのは攻撃の部分である。守備は最小限に保つべきであるが、そこには非常に忍耐とタイミングなどの経験があるので、初学の者は安易にそして無計画に出兵に走りたがる。そして一番目立つ、華としての部分もこの出兵時である。

しかし意味のない遊撃は用兵学で戒める『戦力の逐次投入』であり、これは都市スペック即ち国力を低下させる。下手な指揮官ほど一斉

指揮ができず敵拠点を支配できず、無駄な遊撃に走り、余分な堀（廃墟）を多くつくり、悪戯に戦争を長引かせプレイヤーを疲弊させる。

結局、一斉攻撃と連動しない遊撃は効果が薄く、全体としてのバランスを把握しなければいけない。

侵攻ルートが一つの場合があるため、まずは正攻法である一斉攻撃をしっかりと行い、正攻法で陥落できる力をつけておかなくてはならない。そしてルートが二つ以上あれば、遊撃による陽動と連動させて一斉を行っていけば、遊撃も一斉もどちらも生きてくるのである。

後年、現役生活を終えた遊鈴は兵法書を編纂した。それは遊撃・打通という彼の個人技ではなく、『兵力分散』『逐次投入』を厳しく戒め、兵力を集中して各個撃破する一斉攻撃論と遊撃論が見事なまでに有機的に組み合わさった内容になっていたが、この時点では誰も想像できないことである。

彼は性格からしても楽天主で、こうした理論的な部分に程遠い人物のように思われるが、後年彼を変える事件が起こる。しかし現時点ではまた別の話としておこう。

第十三話『天才と秀才』

【幹部専用チャット】

金剛「おのれえ、朱璃め。奴が生きている間は枕を高くして寝とれぬ。三賢石よ、来期の対策を練っておくのだ。」

石紅【軍事担当】「はは！朱璃の指揮をある程度解析しました。」

軍事担当・石紅の解析はこうである。

通常の指揮官なら1ターン30分中の15分前後の時、つまり0.5ターンで一斉を気づきON指示はその5分後くらいから開始となるのであるが、朱璃の場合は早い時は開始5分程でそれを察知し10分には既に対応しているという恐るべきものであった。

所謂、機動守備であるがこのスピードは他の将に比べると約2～3倍と驚くべき事実であった。

しかしこれが出来るのも鉄壁將軍・夏侯瑜のデータ提供あつてのことであった。

夏侯瑜は守備指示をしつつ相手の更新時間のデータ収集を行い、それを常に朱璃に報告していた。

朱璃はそれを把握し、普段攻撃の来ない武将もしくは神鬼などの高級兵が攻撃に来た場合は即座に反応してON守備を少数で促す。

通常の指示が『OFF守備し、ON攻撃』であり、OFF守備しは民忠と農民に負担をかけないよう雑1と徹底するのであるが、これは一斉攻撃によって剥がれやすい。

15分以上の反応から20分頃のON守備対応では半壊までいく場合があり、ここで通常の将だと壁を頼りに全軍守備としてしまう。しかし朱璃が優れているのは素早い反応スピードでON守備をして守備先頭に兵持ちを浮上させ敵一斉攻撃の出鼻を挫くことにある。

この素早い対応は更新時間にも関係してくる。夏侯瑜の更新時間は10分、つまり10分〜30分までのON武将はそのターンに反応できることとなる。

そして攻撃面では神速將軍・遊鈴が更新時間0分と最速。通常の打通は最速ターンによる波状攻撃で行われるが、遊鈴の最速更新によって同ターン打通が可能となる。つまり打通も一斉攻撃のような形として敵奥深く侵攻していけるのである。

こうした分析報告を聞かされた金剛は戦術的に朱璃を倒すことは不可能と考えた。

これは既に竜虎の戦いで感覚的に分かっていたことではあったが、論理的にもそれを理解したと言えよう。

【幹部専用チャット】

石蒼【外交担当】「それでは前期、金剛様の懇意の方に建国を促せば宜しいかと。そうすれば計画的に外交が可能となります。くつくつく・・・w」

金剛「何？お前はわしに派閥外交（1）をせよと言うのか」

派閥外交（コネ外交）：政治的な用語。派閥の定義としては曖昧であるが「国の枠をこえた人脈による繋がり」とでも言うべきか。こうした繋がりによって共闘や傭兵を行っていく、または一国を本体、もう一国を衛生国のようにして割譲・合併したりとするプレイヤーもいる。

特にルール違反ではないがスパイ程ではないにしても非難を受けることがある。

石蒼「大丈夫でございます。その方に名前を変更してもらえばよいことです。そうすればわかりますまい。くつくつくw」

金剛「石蒼、おぬしも悪よのうw」

石蒼「悪とはこれはお厳しゅうお言葉ですw規約違反ではございませんのでww」

金剛「そう言う事だ。お前は我が意をよく理解しておる。ではリストアップするのでその方面は石蒼、お前に任せよう。」

石蒼「ははあ、かしこまりw」

金剛「序盤から複数で手を組んでいけば朱璃とて打つ手あるまいw」

石黄【人事担当】「先日から試験制度を導入致しました。これで優秀なものとそうでないものが分かります。優秀なものは上位の役職を与えていけばその能力を存分に発揮してくれるでしょう。」

金剛「うむ、電腦模試だったな。成果を期待する。しかし朱璃と互角にやり合うことができる人材がこの国にいるであろうか。」

石黄「模試の結果を見たところ満点を叩き出す天才がおりました。

この者ならば朱璃を打ち負かすことができるやもしれませぬw」

金剛「おお、そのような人材がまだ居たとは。」

石黄「まだ20に満たない若者で実戦経験は少ないものの、なかなか切れる男でして。名を法真と言います。幼少から兵法の英才教育を受け、巷では麒麟児と噂させる逸材にございます。」

金剛「一度、会ってみたい。謁見を許す故ここへ通せ。」

【俊英將軍】ホウシン法真、幼少の頃から兵法を学び若くして頭角を現し麒麟児と噂される。電腦模試で初の満点を叩き出し俊英將軍の称号を授かる。

実戦経験では テスト期ラス戦、遊鈴のON打通に対して守備するのではなく、逆に攻撃を以って埋めることを進言。その打通の多くを看破して見せた。

法真「敵将・遊鈴、この男の攻撃は何と変則的で読み辛いのであるう。ならば攻撃される前に埋めなくてはならない。しかし支配後の

ON攻撃の場合、反応速度は相手の方が断然上である。流石は神速と言われるだけの男。」

法真「それならばOFFで出兵しを一交代で行っていけばよい。人数はこちらの方が多い、そして打通には相手は更に人数を割かねばなるまい。」

この法真のOFF対応によって金剛国は後方までの打通は何とか免れた。もし後方まで荒されれば金剛国は収入が減少し物心両面で追い詰められたかもしれないといわれている。

金剛「法真よ、お前の活躍は三賢石から聞いておる。よくやってくれた。」

法真「非才の身ではございますが、陛下のお役に立てて光栄でございます。」

金剛「恐縮せんでよいぞ。お前の才能ならあの朱璃も倒せるとわしは期待しておる。そこでおぬしを副軍師に任命しようと思う。」

法真「有難き幸せなれど非才の私としましては不相応な役職にございます。どうぞご辞退をお許しくださいます。」

金剛「何？辞退じゃと。一応この国は正軍師を置いておらず三賢石がその官職と同等の権に値しておる。その下で不満であるなら正軍師の地位でもよいぞ。遠慮はするでない。」

法真「私の才では残念ながら朱璃に遠く及びません。またそれ程の武勲も立てた訳では御座いませぬ故、今回の昇進はお見送り願いたいと存じます。」

金剛「おぬしは幼少から兵書を諳んじ、試験では主席合格、実戦でも既に頭角を現しておる。朱璃は戦の天才と呼ばれておるがおぬしもまた天才であろう。」

法真「朱璃殿が天才ならば私は秀才と言ったところです。彼の恐るべきはその状況判断の早さ、機を見るに敏なること神の如しです。」
法真「私は努力した能力でしか御座いません。所詮は人為のレベル。」

しかし元帥・朱璃の才覚は天性のものです。秀才が天才をどのようにして破れましようや。」

金剛「おぬしの才能を以ってしても朱璃は倒せぬと言うのか。」

法真「はい、残念ながら。しかし元帥・朱璃と互角に渡り合える者を一人だけ、私は知っております。」

金剛「何、あの朱璃と互角にだと。その者の名は？」

法真「名は亜沙羅、同門の出であり私の兄弟子（先輩）に当たります。その目は常に真理を捉え、彼の発する言葉は予言であるとも言われております。」

金剛「亜沙羅、余り聞かぬ名前であるが、その男は今どこで何をしておる。」

法真「特に特定の国に仕官する気もなく、天下の形勢を見つつ諸国を転々していると聞きます。数年に一度、故郷に戻って来ます故、亜沙羅に仕官を勧め陛下に推挙したいと思います。」

金剛「よしわかった。では来期までまだ時間もあることである、そこはおぬしに任せるとしよう。必ずや亜沙羅を連れて参れ。」

第十四話『同門、再会す』

電腦歴元年、この年のみは電腦空間の更新は止まりリアル時間のみが過ぎる。

この時間を利用して前期の傷を癒すもの、反省・分析をするもの、来期の計画を立てるもの、様々である。

そして俊英將軍・法真もこの時間を利用して帰郷した後、軍神將軍と称される亜沙羅の元を訪ねた。

法真「先輩、お久しぶりでございます。そろそろ帰って来ると思いました。お待ちしております。」

亜沙羅「法真か、久しぶりだね。出世したと聞いているがラス2国の名將を待たせてしまつとはとんだ失礼をしているな、私はw」

法真「何を仰います、先輩が本気になればこの中華全土を手中に治めることなど造作もないことでしょうに。」

亜沙羅「私は天下と言うものには興味はないね。物思いに耽りながら釣りをしていた方がいいなwしかもそんな法螺を吹くのは君と粹狂先生くらいなもんだよ。それはそうと粹狂先生はどうしておられる？」

法真「はい、半年程前、残念ながらお亡くなりになりました。酒を控えるよう医者に言われていたにも関わらず飲みすぎが原因とか。」

亜沙羅「そうか、好きなことをしてあの世に逝かれたなら先生も本望であつたろう。後で墓参りにいくとするか。」

法真「それにしても先輩、ヒドイ格好してますね……。それでは先生に笑われますよw」

亜沙羅「いやあ、旅先で金がなくなつてしまつてね。服も買えずに困つてしまつたよ。まあボロを纏つていても死ぬわけじゃない。」

法真「じゃ、そろそろ給料稼ぎにでも仕官先を探されてはどうです

？」

亜沙羅「あはは、君は私に仕官を勧めにきたのかい？」

法真「はい、先輩のような人を在野に眠らせておくのは勿体ないです。そして我が君、金剛は古今東西の名君であり、先輩が仕えるに相応しい人物と思います。」

亜沙羅「テストラス2君主・金剛、確かに仕える価値のある人物だ。しかし先方が私を必要とするだろうか。」

亜沙羅「私は君も知つてと思うが基本、傍観者だ。ONも気まぐれだしあまり縛られるのが好きでないんでねえ。」

法真「そこは私が精一杯推挙させて頂きますのでご安心を。」

亜沙羅「しかし今の金剛国に私が必要とは思えないんだよ。やつぱり暫くまだ在野でのんびりするかな。家の貯金を下ろせばまだ生活はできるだろうし。」

法真「いえ、あの戦争の天才である尊厳元帥・朱璃を倒せるのは天下広しと言えども亜沙羅先輩しかいません。」

亜沙羅「確かに元帥・朱璃は類稀なる才能の持ち主だ。しかしそれは戦術レベルのこと。戦略レベルでは君主・金剛の方が上であり、来期は先手で対策を打つ場合、金剛有利となり金剛国は統一最有力候補となるのではないかな。」

亜沙羅「それに君だつて悪くない。幼き頃から兵書を諳んじ、最年少で電腦模試に主席合格、実戦レベルでも武勲を立て出世した若き副軍師。粹狂塾きつての優等生であり、当塾の誇りである。とまあ、その辺でほつき歩いてる私とは大違いだな。」

法真「私の学んだ学問は書物の範囲であり、それを応用したに過ぎません。しかし先輩の学問は森羅万象を相手にしており、上は天文・下は地理に通じその真理を掴むレベルには到底敵いません。あの元帥・朱璃を倒せるのは先輩の他いないでしょう。」

法真「それともう一つ理由があります。それは他鯖（1）から今期、戦略の天才・志風がこの鯖に参戦するとの噂を耳にしました。彼なら朱璃を動かして打倒金剛国をしてくるのではないかと私は読

んでいます。これを君主・金剛が見抜ければよいのですが。」

1 他鯖：他のサーバー

亜沙羅「私もその噂は聞いている。しかしそれは噂のレベルであるしまだわからないことだ。これも噂レベルだが無所属宛の噂では君主・金剛に批判的な噂はあるが、これを君はどう思うかい。」

法真「確かに君主・金剛は『規約に違反しない限り仕様で出来ることであるなら可』と言う考えの持ち主です。そうしたゲームに対する殺伐とした考え方が一部のプレイヤーに不評を買っているに過ぎないと思われます。」

亜沙羅「そうだね、私も噂をそこまで参考にしようとは思わないよ。私はゲームはゲームとしてつまり娯楽として楽しむつもりだから、やはりそのゲーム性を重視したい。そこで各国の戦力差を見つつ、1プレイヤーしてバランスを取っていきたいとは思っているねえ。」

法真「私も先輩の意見に同意です。ただうちの家系は金氏に代々仕えており、そこで私も仕官したと言う経緯があります。もしそうしたことがなければ私もどこに仕官していたかは分かりません。しかしこれも一つの運命であると捉えています。」

亜沙羅「人間は自分一人で生きているわけではない、様々な社会制約があるから仕方のない部分はあるだろうね。運命と言うパラメータがこの世に存在するかどうかは別として人間個人としての自由意志があることは忘れてはいけないよ。」

法真「強い意志を持って行動することも時には重要ですよね。」

亜沙羅「ただそれが強すぎて苦しいだろうね。それが元帥・朱璃の生き方だろう。」

亜沙羅「私は彼の生き方には尊敬はするが賛同はしない。彼のように全ての人が強い存在であるなら、それもよいだろう。しかし大多数の人間はやはり弱い存在だ。そして彼程の才能を持った人間もそうはいない。」

亜沙羅「彼はゲームを娯楽よりも一つ上のものとして考えているんだろっね。哲学や理念といったものを持ってプレイしているんだろっ。私は運命によって縛られるのも嫌だけど自らをその強すぎる信念や意志で縛るのもごめんだ。」

法真「じゃあ先輩の場合は『ゲームとは娯楽であり気楽にプレイすることである』ってのが哲学ですかねw」

亜沙羅「そうだね、何事も程々にそして自然体であること。もし哲学的な表現を用いるなら『中庸』とか『無為』と言ったところかね。かつて基軸の時代と呼ばれた頃には様々な思想家が出てそれぞれレベルはあるが数々の教義を残した。彼らは決して難解な言葉では表現せずそれを体現して見せたが、そうしたことを概念としてまたは学問として残したのは後の人だろうね。」

法真は亜沙羅と夜を徹して話し合った。そして法真は普段とは違う亜沙羅のもう一つの面を再確認し、尊厳元帥・朱璃を倒せるのはこの男以外には存在しないと確信した。

亜沙羅の楽天的で自然体の姿は彼の言う中庸や無為自然の体現であると言ってもよく、彼自身自ら哲学者であることを否定しつつもその哲学的人格のスケールは壮大であると法真は感じた。

元帥・朱璃もまた巨大な人格の持ち主であったが、彼が有であるならば亜沙羅は無であるとそれは対照的とも言えた。

法真「つまり先輩は全体の戦力バランスをとるための仕官、これが基準な訳ですね。ならもし志風が朱璃と同じ国になった場合、もしくは他国でも手を結んだ場合は金剛国に仕官と言うことでどうでしょう。」

亜沙羅「そうだね。それに後輩の頼みだ、その場合は仕官させてもらうよ。まあ私が役に立つかどうかはわからないがw」

法真「その時がもし来た場合はお待ちしております。」

運命に対する人間の自由意志を主張する亜沙羅であつたが、時代の波は彼の意志とは関係なく彼を表舞台へと押し上げるのであつた。

第十五話『人と思想』

テスト期が終わり第一期の登録が開始された。

朱璃は黄河国を興した初心者君主・馬翔の要請をつけていたが登録が遅れており、先行して両翼と言われる彼の側近・夏侯瑜と遊鈴が既に仕官していた。

茂宮「もきゅ いよいよこの鯖がオープンですね」

郭明「茂宮よ、よく見ておくがよい。鯖オープン時と言うものは活気に満ち溢れているものじゃ。そして格鯖からつわものどもが参戦してくる。わしも昔はよく色々な鯖に遠征したものじゃてw」

茂宮「はい、老師さま、この目に焼付けます」

茂宮「それはそうと、夏侯瑜・遊鈴と言った両翼の将が黄河国に仕官したと言うことは元帥・朱璃もここに仕官すると言うことですねもきゅ」

郭明「恐らくそうじゃろな、朱璃が己の力を最大限に発揮できるのはあの二将が居るからじゃ」

茂宮「こう言うのを派閥って言うんでしょ、匿名の裏電脳掲示板でよく話題になってます。もきゅ」

郭明「さあ、どうじゃろなwわしはそう言う噂には関心がないじゃてwふおおふおおw」

この電脳空間に管理人と呼ばれる神的存在があり、その管理人が電脳掲示板を設けており、そこに管理人からの仕様変更の告知や登録者の要望などが書き込まれる。

これに対してもう一つの掲示板が存在する。その掲示板は匿名の掲示板であり、管理人が設置する正規電脳掲示板に対して裏電脳掲示板と呼ばれている。

この裏電脳掲示板には各国の噂話やネタ的な話題、時には中傷や晒

し、情報操作と言ったものまでが流れる。

268 名前： 名無しさん 「sage」 投稿日： ****
/ ** / ** (*) ** : ** : ** ID : **** *

遊鈴が黄河国に仕官しました。

夏侯瑜が黄河国に仕官しました。

黄河国、ここは派閥だなw

269 名前： 名無しさん 「sage」 投稿日： ****
/ ** / ** (*) ** : ** : ** ID : **** *

後は朱璃が来たら派閥完成ですw

270 名前： 名無しさん 「sage」 投稿日： ****
/ ** / ** (*) ** : ** : ** ID : **** *

朱璃派閥ウゼーwww

こうした話題は粹狂塾でも一つの議題として上がっていた。

粹狂塾では老いた粹狂に代わって塾頭であった法真が普段は教鞭を振るっていたが、c o o l期間のみは帰郷する亜沙羅が講師を務めることとなっていた。

現在は粹狂は老衰のため死去、法真は仕官先の任務、亜沙羅は放浪の旅とほぼ講師不在の状態であり、僅かc o o l期間に寄り合い的に粹狂塾は存続していた。

コチヨウ
胡蝶【門下生】「やはりあの二国は派閥とみていいのでしょうか」

亜沙羅【講師】「電腦掲示板の『派閥』と言う言葉はリアルでのそれとはやや異なるニュアンスだね。」

胡蝶「確かにリアルでは『三人寄ると派閥ができる』とかよく耳にしますが、よく考えると違和感を感じますね。」

亜沙羅「まず匿名の掲示板についてだが、匿名に意見性はないこと

は理解しておこう。だからその意見には責任を持つ必要がないし、いい加減なことだって言えてしまう。これはあくまでも噂レベルだから一つの参考の要素とするならいいが、真に受けてしまつてはいけないな。」

胡蝶「はい、わかりました」

亜沙羅「単なるネタと言うこともあるが、噂レベルの情報の裏には流す者の意図が存在する場合があるから、その情報に踊らされないように真実を見抜く眼が必要になる。」

亜沙羅「そして『派閥』だがこれは一つの政治的な言葉として理解していいだろう。やや乱暴に言うなら他国の国家イメージを低下させることができるような言葉なら何でもよい訳さ。」

亜沙羅「私なりに『派閥』を少し真面目に定義してみると『思想・利益等を共有する集団』とでも言うかな。通常はそれが国家の枠組みとしてその集団が形成されるはずなんだろうけど、その国境を越えた人脈による集団、俗にコネとか言うがそんな感じだろうね。」

亜沙羅「この掲示板の場合、遊鈴・夏侯瑜・朱璃が同じ国ならそれは派閥と非難するのはやや滑稽に感じるね。それは金剛と三賢石が同じ国であることもそうだ。」

亜沙羅「例えばこの側近たちが他国に散らばつて二国間で蓮外交や序盤に合併するなど不自然な外交をしたり、その国の情報を流すと言ったスパイ行為をするならゲーム中での『派閥』として意味付けできるかもしれない。要するに仕官先の国を統一させるために努力するのではなく、他国に属していてもどこか特定の国を統一させたいとする考えの集団つてところだね。」

胡蝶「そう言われてみるとそちらの方が『派閥』としてのニュアンスとしてはしっくりきます。つまり国家の枠組みを越えた特定の人との繋がりである。」

亜沙羅「ゲームだから仲の良い者同士でグループができ一国に仕官が集中するのは自然だと私は思うんだよね。コミュニケーションを楽しむのもゲームの一つだと思う。また序盤に一国に仕官が集中す

れば警戒され共闘の対象になるだろうし、人数に対しての支配都市数が少なければ収入も厳しくなる。そこはプレイヤーの戦略次第さ。

「
胡蝶「しかし、スパイも戦術の一つであるとする考えもありますよね？」

亜沙羅「それはリアルな戦争の話であって、それをゲームの世界に当てはめるのはナンセンスだと私は思うね。」

亜沙羅「例えばスパイによって戦略レベルでは外交が優位に進めることができ、戦術レベルにおいては一斉攻撃に対応できてしまう等とゲーム性が著しく低下してしまう。つまり駆け引きとして楽しむと言うゲーム内での重要な部分が損なわれるんだ。」

胡蝶「それはなんかつまらないですね。」

亜沙羅「例えばスパイ一人によって共闘を回避できたとする。そうになると一人の力で一国分を戦略的に無力化してしまうことになるんだ。これはある意味凄いことだね。」

亜沙羅「しかし本来の共闘回避は不可侵の破棄後猶予を各国格差をつける、戦時中破棄不可をつけるなどして長期的戦略としてやっていく。長期的な思考と展望を持つこと、こちらの方がゲーム性は高いと言えるんだよ。」

胡蝶「なるほど、それがゲーム性なんですな」

亜沙羅「そうだね、リアルな戦争は生命が掛かってるから兎に角勝つことを考えないといけないけど、これはゲームだから楽しむことを考えてプレイすることが推奨されるね。」

亜沙羅「ただ三国志NET自体にスパイをしてはいけなくとする暗黙の空気はあるけど明文化されたルールは存在しないから、それは個人のプレイスタイルに依存すると言っていていいだろう。」

胡蝶「この塾を卒業して仕官しても私はスパイはしないようにしますw」

亜沙羅「うん、それでいいんだ。そうした自発性を多くのプレイヤーが持てるといいね。鯖によっては管理人がスパイ禁止と規約で設

けているところもあるけど、スパイは内部告発でもない限り公には出ないだろう。だから実質、個人のプレイスタイルってことになるだろうね。」

亜沙羅「ゲームのシステムをつくるのは管理人だけど、ゲーム性を形成していくのは個々のプレイヤーなんだ。その良きプレイヤーの一人に君はなれるといいね。」

胡蝶「はい！そうなるように努力します。」

亜沙羅「よし、今日の授業はこれまでだ。と言っても胡蝶しか今日はいないなw」

胡蝶「特別授業、ありがとうございました！亜沙羅先輩w」

亜沙羅「しかし私はどうもこう言う講師とか堅苦しいのは苦手だね。法真が居ないから仕方なくやっているんだよ。そしてボランティアだ、なんてこつたいw」

胡蝶「卒業したら私が出世いたしますのでご安心をw」

亜沙羅「そおか、そんなときは頼むよw」

こうした亜沙羅の考え方は後に道徳論として残った。

多くの道徳教本は学者によって『ネットマナー』や『ネチケツ』のような言葉で書かれているのに対して、亜沙羅の言葉は『戦略性』『ゲーム性』としてであり、諸学者のそれとは異なる言葉で説かれていたことに特徴がある。

つまり亜沙羅は学者としてマナーを説くのではなく、一人の兵法実践家からの観点を説いた。しかしその言葉は他者に強制するものではなく個々人の『プレイスタイル』とし、決して『善悪』とは定義していなかったとされる。

粹狂塾門下生には後に亜沙羅の側近として活躍する神鬼將軍・胡蝶がいたが、後年、彼は亜沙羅のことを、
「その長じているのは兵法のみならず、柔和にして巨大な人格の持ち主」

と語ったと言っ。

第十六話『白き心、入城す』

【全体ログ】

第一期のゲームプログラムが開始されました。

夏侯瑜「いよいよ第一期スタートか。」

遊鈴「うはは、腕がなるぜ。」

夏侯瑜「遊鈴、そう逸るな。まず内政が第一だ。戦争には農民がいるし金・米も必要だ。それに強い兵を雇うには技術もいる。殴り合いになったら城壁値で勝負は決まる。まずそうした下地作りが序盤は必要だ。」

遊鈴「めんどくせーな。俺は武官だから守備ALLで金たまつたら武力強化で2ループくらいにしておくよ。内政は夏侯瑜にまかせたw」

夏侯瑜「遊鈴、それは一部将の仕事だ。お前も私も君主から国内指揮を任されている。それなりに働けよ。」

遊鈴「ほいほい、わかつたよw」1月～6月まで農業、7月～12月まで商業『これで指令変更しておけばいいんだろ。』

夏侯瑜「序盤はそれで十分だな、まずは満額の給料が出ることが最優先だ。」

遊鈴「腹が減つては戦もできぬ、だからなw」

夏侯瑜「そういうことだ。戦時中に満額が出ない場合資金差で押されることもあり得る。」

夏侯瑜「戦時中のコマンドが「徴兵＞守備」の守備しを基本として考える場合、貢献値は「徴兵：10、守備：25」となる。これを半年繰り返すから」 $(10 + 25) * 3 = 105$ 「これが戦時中の基本的な貢献値となる。戦勝の貢献値は加算してないから最低限の貢献値だな。」

遊鈴「夏侯瑜の話を聞いていると頭痛くなるぜ。そんなの知らなく

てもコマ入力すりゃ金米もらえるってw」

夏侯瑜「何度も言うようだがこれは一部将としてでなく国を統括する指揮官としてってことを話しているんだ。ちよっとは真面目にそこをお前も考えろ。」

遊鈴「人間、向き不向きあるけど俺には向いてねーかなあw」

夏侯瑜「まあ向いてなくても聞け、いつかは役に立つかもしれん。」

遊鈴「ほいほいw」

夏侯瑜「お前の言うように普段は武官なら「守備＞能力強化」で半年の貢献値75、文官なら「内政＞能力強化」で半年の貢献値90、これくらいで満額は欲しいところだ。」

夏侯瑜「内政値があることで個人ステ強化にコマを回すことができ、それが戦争では戦力差となる。つまり戦略レベルでの内政値は戦術レベルのステ差となって反映されることとなる。」

夏侯瑜「だから国家の人数と領土はこの辺りも一つの参考として戦略を組んでいくといい。もちろん、地形・人数差・条約などの総合的判断が最終的な戦略決定となるんだが。」

遊鈴「俺は面白い戦いができりやそれで満足だけどなw」

夏侯瑜「お前の価値観は戦術レベルに偏りすぎだ。もつと戦略面も考えたほうがいいぞ。人間、バランスつてもんが大切だ。」

遊鈴「人を欠陥人間みたいに言いやがって、まったくよく。」

夏侯瑜「私は今まで生きてきて遊鈴からまともな発言を聞いたことがない。」

遊鈴「ちょw今まで生きてきてって、そんな大袈裟な言い方あるかいw」

夏侯瑜「まあ聞け、続きだ。技術は100で弓兵が徴兵できればいい。この電腦空間は攻撃優位の仕様だけど、それはステ的に攻撃力の方が重要だからだ。また弓兵が徴兵できれば兵役開放もでき平時の米節約にもなる。」

遊鈴「夏侯瑜、お前の好きな護衛兵はどうなんだ？」

夏侯瑜「技術200の護衛兵もあるに越したことない。兵種には相

性があり俗に『三竦み』と言ったりもするが、それは「騎馬>護衛>弓>騎馬」の関係となる。弓は「攻撃力10、防御力0」で護衛は「攻撃力0、防御力20」と護衛兵はステ的にも高いが、更に兵種相性でも弓徴兵に対して護衛徴兵は戦争を優位に進めることができる。特に兵種相性にボーナスが大きく修正の入っている鯖では重要だ。」

遊鈴「じゃんけんみたいなもんだな、三竦みwそう言う駆け引きは俺は好きだぜw」

夏侯瑜「技術300になると騎馬が徴兵でき、護衛守備に対して効果を発揮するため、一斉時には騎馬一斉徴兵も有効な戦術だが序盤ではコスト50ときついため、技術上げはコスト30である護衛徴兵の200までがせいぜいだろ。」

遊鈴「懐具合も考えると男はやっぱ弓でガンガン攻撃だなw仕様によつては弓は壁に強かったりするしw手柄は俺のものだぜw」

夏侯瑜「もう一つのメリットとしては各將軍の職申請だ。職には元帥・騎馬將軍・護衛將軍・弓將軍・雑將軍とある。これを複数使うことで攻撃力に+10のステ差をだしていく。これも重要なことだ。」

遊鈴「職回しが面倒そうだけどな。あれは廃仕様で好きじゃねーんだよ。」

夏侯瑜「確かに職付けは君主・軍師の仕事ではあるが、戦争指示をしつつ職回しなんか体力が持たない。職回しと指揮は分担しつつが理想的だと私と思う。」

遊鈴「しかし朱璃の兄貴はそれを一人でやっちまうからすげーんだよな。ありや超人だぜ。」

夏侯瑜「しかしいくら朱璃が非凡な才能の持ち主と言ってもやはり人間だ。前期のラス戦では40年以上の長期戦となったが戦時中に数度昏倒している。未だ朱璃の仕官がないのはその傷が回復していないためだろう。朱璃が来るまでは俺たちで何とかしないと。」

遊鈴「そうだな、兄貴は指揮・職回し同時にほぼ一人でやっていた

んだからぶつ倒れるのも無理ないぜ。」

この夏侯瑜の予想と心配は当たっていた。朱璃は テスト期ラス戦での激務が祟って過労で伏していた。医者からは絶対安静の注意を受けていたが「戦場で死すことこそ武人である」と言い放ち、周囲が制止するにもかかわらずそれを振り払い予定通り黄河国へ入国する。更新開始から4年近くが経つ戦闘解除直前のことであつた。

朱璃が黄河国に仕官しました。

この尊厳元帥入国の報は各国に伝えられた。

【金剛国】

金剛「ほう、やはり予定通り前期の長江の面子は黄河に集中したか。あの時は戦術レベルで膠着させられたが今度はそうはいかぬ。戦略的に先手を打ってこれを撃破して見せよう。」

石蒼「黄河国には既に不可侵と破棄不可の条約を取り付けておきました。初心者君主は手玉に取りやすいですww朱璃の入国が遅れたのも幸いしておりますw」

金剛「まあ朱璃の性格だから破棄不可なくとも真つ向勝負を挑んでくるだろう。後は傭兵くらいで戦力を補つてくるかもしれないが、そこは各国と足並み揃えて戦略を組めばいい。」

法真「（遂に元帥・朱璃が動いたか。未だに戦略の大家として名高い志風はどこにも入国していないのが気になるところだ。君主や三賢石は全く警戒していないが、こちらの存在の方が不気味にも思える。）」

【在野1】

茂宮「尊厳元帥・朱璃が黄河国に仕官したみたいですね。もきゅ

今期も金剛国と元帥・朱璃率いる国のラスになりそうですね？」
郭明「その可能性は低いと見てよいと思うな。戦略に長じておる金剛は朱璃を既にマークしておるため中盤辺りで潰す戦略をとるであろう。朱璃側はそこをどう見越して動くかにあるのう。ふおふおおw」

【在野2】

胡蝶「法真先輩は朱璃と志風が今期、組んでくると予想して亜沙羅先輩に出仕の要請をしたとお聞きました。朱璃の仕官の遅れは前期の激務によるものであり、未だ全快には至らないそうです。戦略の天才と言われる志風は結局現れずと言ったところでしょうか。」

亜沙羅「さあ、どうだろね。ゲームつてのは蓋を開けてみないとわからないものさ。だから面白いんだ。じゃ、私はまた旅に出るよ。

留守は胡蝶、君に任せるよ。後は宜しく。」

胡蝶「先輩、ちゃんと三食毎日食べてくださいね。そして川があったら釣りする前に洗濯をしてくださいよ。」

亜沙羅「言われなくてもわかってるよwそれに釣りをする前に洗濯したら魚が逃げてしまうだろw」

胡蝶「法真先輩から聞きましたよ、先日会った時にひどい格好だったってw」

亜沙羅「色々と大人の事情つてのがあるのさw君は私のことはいいから頑張つて自分の勉強してくれたまえw」

胡蝶「はい、了解しましたw」

亜沙羅「（今期の金剛は朱璃へだけでなくどの国へも戦略的に各個撃破を確実に狙ってくるだろう。この場合、戦術レベルで行動する朱璃よりも戦略レベルで先手を打ってくる金剛の方が各国からしたら脅威だ。だからと言ってこれがわかっていても彼の戦略を超える戦略を打つことが出来る人間がどれだけいるだろうか。）」

亜沙羅「（初参戦の志風にないのは人脈だ。戦略には最低限の人数

は必要。そこで彼は今は金剛に対抗できそうな国の動向などを見ていると考えるべきであり、これを仕官が遅れていると見るのは誤りではないであろうか。」

噂によつて志風と言う戦略家の存在を知るものは幾人も居たが、彼の戦略を正確に予想できた者は亜沙羅のみであつた。

これは亜沙羅が在野の士であり、傍観者として客観的に見ることの出来る立場でもあつたことも一つだが、彼もまた類稀なる才能の持ち主であり、正に天才は天才を知るであつた。

この電腦空間に存在する天才と呼ばれる人種は戦略・戦術と言ふ言語を通して無言のコミュニケーションを取り合っているかの様であつた。

次元に高次が存在するのであるならば、多くの人々が想像する超越的な神の世界ではなく、極少数の天才たちの間に存在する場（概念的な意味での場）にあるのかもしれない。

一方、尊厳元帥・朱璃の入国はまた別の意味でも諸將を驚愕させた。テストラス戦は40年以上にも及ぶ激戦であつた。そして更に戦略的不利を戦術的にカバーした負担の多くは朱璃の両肩に押し掛かり体力を奪つた。そしてそれはCOOL期間の僅かな休養では癒えるものではなかつた。

また極度のストレスからか朱璃の黒かつた髪の色は雪のように真っ白となつていた。恐らく体力的には急激に低下していたのであろうが、そのオーラは以前にも増して輝きを放っているようにも思え、その入城する姿は歴戦の勇者宛ら堂々としたものであり、それを見た民衆は神々しささえ感じたという。

朱璃は普段から銀色の鎧を身に纏い白いマントを羽織つており、その白髪は白と言うよりも銀色に輝きを放つように見えた。そうしたことから尊厳元帥・朱璃を『白金の元帥』と呼ぶ者も居た。

清廉潔白を『白き心』と表現することもあるが、それは朱璃のよう

な人格を示す言葉であるかの様であつた。

第十七話『鳳凰復活』

金剛国は中央部の洛陽を建国の地とし、初期は外交で固め人数差があり勝てそうな国を狙い撃破していくことを基本戦略とした。

金剛の名声と登用力はその戦略の根本であり、これなくして金剛国の戦略は成り立たない。更新開始から解除ターンまでは仕官卒が15人と決まっているので、金剛国は序盤の乱戦を避ける戦略を最優先とした。

金剛が中央部の都市を好んで建国するのは、一つには自らの権力を誇示する意味もあったが、中央都市は辺境都市に比べて都市スペックがよく、もし外交で上手く周辺を固めていけるのなら鍛錬・蓄財の面で有利になるからである。

またもし乱戦になったとしても城壁の高い都市を選んでおけば、同数での殴りあいの場合には城壁値が高い方が有利となる、それも理由の一つであった。この中央建国ができるのも金剛の外交手腕あつてのことである。

一方、広陵を建国の地とする黄河国は南と結び北を攻めることを基本戦略とした。

黄河国の隣接する空白地は寿春のみであり、その地を巡って解除ターン直後、陳留の流水国と開戦することとなった。

兵力は流水国15名vs黄河国12名のほぼ同数の戦いであり、開戦後は乱戦になるかと思われた。初期の乱戦は他国よりも戦略が遅れることとなるのでその空白地に拘るのではなく、人数の少ない国への戦略変更をした方がよいと見る国民もあり、これは初心者君主・馬翔の戦略ミスではないかと噂する者もいた。

解除ターン直前に尊厳元帥・朱璃入国となり黄河国の士気は大いに高まったが、一方では体力の衰えた朱璃に対して既に往年の力は無

いと噂するものもいた。

開戦直前の朱璃入国と言うこともあり、作戦が不十分のまま流水国との戦いは始まった。人数が若干黄河国の方が劣り、戦争準備が遅れたこともあり、城壁まで到達されないにしても守備枚数が削られ押され気味に戦況は進んでいた。

攻撃有利の仕様から、味方守備が安定しており敵守備が少ない場合、常に波状攻撃の状態となる。流水国はその波状攻撃の状態となり黄河国を圧していた。この状態を焦ったのが黄河国君主・馬翔であった。馬翔は指揮慣れしておらず明らかに経験不足であったがそれを朱璃はよく助けた。

馬翔「守備が少ないです><全軍守備についてから攻撃した方がよいですよね><;」

朱璃「大丈夫ですよ、君主殿。最低限の守備枚数を確保しつつこちらも強気に攻撃を入れていきましょう。」

馬翔「そ、そうですね。何枚くらいがよいのでしょうか？」

朱璃「夏侯瑜、敵官種のデータを頼む。」

夏侯瑜「了解。15名のうち「武官：8名、統率官3名、文官4名」。」

朱璃「武統官合わせて11名を「徴兵>守備」で対応する場合、こちらの守備枚数は5枚を最低限の守備数として後はONで対応していけば大丈夫です。」

朱璃「OFF守備し、ON攻撃。守備5枚以上確保後、攻撃してください。』指令はこんな感じでよいと思います。」

馬翔「わかりました、すぐに指令を書き換えておきます。」

朱璃「そして反撃も考えましょう。守備しつつ攻撃をこちらにも加えていくのは相手の守備を常に減らしどこかで攻守転換を狙うためです。今からその一斉計画をしていきましょう。」

【会議室】

攻守轉換一齊

攻擊目標：陳留

武官
 文官
 統官

8年01月 - - * * - - - - * * - - - - 徴兵 - - - -

8年02月 - 徵兵 - - - 雜01 - - - 訓練 - - -

8年03月 - 守備 - - - 守備 - - - 守備 - - - <

OFF 一斉守備

8年04月 - 徴兵 - - - 雑29 - - - 徴兵 - - -

<ON 守備

8年05月 - 出兵 - - - - 出兵 - - - - 訓練 - - - - <

ON/OFF一斉攻撃

8年06月 - 出兵 - - - - 雑01 - - - - 出兵 - - - -

8年07月 - 守備 - 出兵 -

「徴兵」はMAX徴兵ですが末尾9入力をお願いします。

・神鬼徴兵する文官は守備に入らず待機、武官の一斉ターンに合わせて出兵。

・OFF出兵が空出兵にならないように8年4月はON守備をお願いします。

・ 8 年 7 月の時点で守備枚数が逆転したら ON 波状攻撃で攻勢にでます。

朱璃より
LANK「**」
「黄河国」

$$\frac{**}{**} \left(\begin{matrix} ** \\ ** \\ ** \end{matrix} \right) \begin{matrix} ** \\ ** \\ : \\ ** \\ ** \end{matrix}$$

黄河国指令：8年5月から陳留一斉攻撃！オフコマンドは会議室にありますのでオフの方は入力をお願いします（元帥：朱璃より）

朱璃のON指示には華麗さがあつた。状況判断に優れ機を見るに敏であり、その機に乗じて仕掛ける戦術指揮は芸術とも言つべであり、人々はそのように朱璃を見ていた。

しかしその大胆な指揮ぶりとは対極に会議室にはOFFを統括する綿密なる計画性が確認でき、このOFFとONのバランスこそが大用兵家・朱璃の恐るべきところであつた。

朱璃「もうすぐ一斉です。一斉時ONされる方は一斉1ターン前に守備入力にて守備先頭についておいてください。」

このように指示するのは三国志NETの守備がその先頭から処理される構造となっているからである。

OFFで守備に入る場合、壊滅する可能性があり、壊滅した場合、次のOFFコマンドを出兵とすると、この出兵は兵0での空出兵となつてしう。

そのため朱璃は会議室のオフコマンドを「守備>徴兵>出兵」としたのである。また壊滅せず守備が残つたまま徴兵ターンの後に攻撃を受けて壊滅する可能性も無くはない。そのためそのターンにはONで一斉守備をするのである。

普段は『OFF守備、ON攻撃』が戦術の基本なのであるが、この一斉攻撃時はそれがまったく逆になる。つまり『OFFで攻撃、ONで必要な分だけの守備対応』なのである。

その一斉前にOFFで守備を入れることで一時的に守備を増やして一斉攻撃に一気に転じる、これを攻守転換一斉と朱璃は名づけた。そしてこの攻守転換一斉によって文字通り守備枚数が逆転し、一気に黄河国は攻勢にできることができたのであつた。

夏侯瑜「こちらの守備6に対して敵守備4です。」

朱璃「よし、このまま波状攻撃を仕掛ける。オフになる人は「徴兵

> 攻撃> 攻撃」を2回程繰り返し、その後守備しになるようにしておいてください。」

馬翔「おお、流石は朱璃殿！お見事です！」

朱璃「まだ都市陥落には至っておりませんので油断せぬようにきたいと思っています。」

夏侯瑜「しかし相手の守備も堅いな。敵守備残り2まではいくのだからそこから守備浮上されてしまう。」

馬翔「ならばもう一回一斉攻撃を加えるのはどうなのでしょう。」

朱璃「確かに攻撃枚数が欲しいところですが、この場合は守備を削っているので相手は攻勢にでれないのです。もし足並みを揃えた攻撃をこちらがすると、一斉の1ターン前に敵の守備浮上が多くなり逆に反撃を食らう可能性も出てきます。」

馬翔「ではどうしたらよいでしょうか。」

朱璃「ここは波状攻撃を継続しつつOFFでも更に波状攻撃を入れましょう。一斉のように足並み揃える必要はなく、つまり攻撃枚数のみを増大させるのがこの作戦の狙いです。」

馬翔「なるほど」

朱璃「波状総攻撃とでもいいいきましょうか、これでいきましょう。」

黄河国指令：9年2月から各自のタイミングで波状総攻撃をかけます。会議室のコマンドのいずれかを入力ください（元帥：朱璃より）

【黄河国会議室】

波状総攻撃

攻撃目標：陳留

- - - - - 武官A - - - - - 武官B - - - - - 統官A
- - - - - 統官B - - - - -

***年11月 - - * - - - - * - - - - * - - - - *

しかしその8月、流水国の捨て身の反撃に合い黄河国広陵も城壁値600から400となり双方入り乱れる混戦状態となった。

馬翔「こちららも城壁が削られております。ここはどうでしょうか。。。」

朱璃「大丈夫です、先にこちらがOFFで削っており壁によって出兵壊滅したため敵守備が一時的に浮上して相手も反撃に出た形となっただけです。」

朱璃「城壁値もこちらが上ですしここは先に仕掛けた方が勝ちます。ターン的にはこちらの攻撃が先ですので、このまま波状攻撃を続行しましょう。後2〜3ターンでいけると思われます。」

馬翔「わかりました、波状攻撃続行と言うことでお願いします。」

城壁によって出兵側が一時的に壊滅するために、守備側は守備枚数が一時的に増える場合があり、そこから反撃を受けることも暫しある。このことは朱璃の想定範囲であり、彼我ターンと言う見えない要素までこの男は把握していた。

そして朱璃の予想通り3ターン後の9年10月に陳留は陥落し黄河国は流水国を打ち破ったのであった。

【支配】 9年10月黄河国の遊鈴が陳留を支配しました。

【滅亡】 流水国が滅亡しました。

朱璃は40年戦争による疲労によって満足に指揮ができないのではないか、との噂もあったのであるが、その采配は以前と全く遜色なく見事なものであった。

この攻守転換からの波状総攻撃を見た民衆は「尊厳元帥復活」を歓喜し彼が不死鳥と称される所以を再確認するのであった。

第十八話『伝説の外交官』

山吹国は襄陽を建国の地とし解除ターンから北の新野一国を取り内政期間に入ったところであった。この国の君主・王廉は平凡な君主であつたが、期にも建国しておりその関係から仕官者が増え人数的には中堅国家となつた。

しかし王廉自体身体が弱いためONが満足にできず国内内政や戦略において他国よりも遅れを取っていた。そこに金剛国の南下があつた。この大国に隣接した山吹国の国内は混乱し王廉の器量ではその収集がつかなくかつた。

そこに調度仕官したのが名宰相と言われる志風であつた。戦術の天才・朱璃は身の丈190センチもある大男であつたがそれに対して戦略の天才・志風は160センチ程の小柄な男であつたと言う。

また対照的に不敗の将であつた朱璃はその陣頭指揮にも関わらず殆ど傷と言う傷を負つたことがなく、一方の志風は身体中にいくつかの傷を負つていた。

その傷は小さなものから大きなものまであり、戦場で受けたものもあるが頬と背中にある大きな傷跡は交渉時に負つたものであつた。それはある国の君主同士の会談のことであり、お互いの利害がなかなか一致せず交渉が白熱し更に口論へと発展し、終いにはお互いに剣を抜くまでになつた。そして正にその斬り合いになつたところに身体を張つて止めに入つたのが志風であり、

「この命一つで交渉が纏まるのであるならば、この命何時でもお二方に差し上げましょう」

と静かに低い声で言つたという。そこで二君は我に返り、正気になつた二人の君主から妥協点を出し見事交渉を成立させたと言う。

志風は緻密な男であつたが、決して頭だけで考えるのではなくまず行動から入るタイプの人間であつた。そのため彼を知るものは口先

だけでない誠意を感じ、そこに外交交渉の信頼性を置くものも国の内外を問わず多くいた。

しかし志風に戦略眼と器量があっても新規参入の人間であるため、二期目の金剛や朱璃にはどうしても一步も二歩も後ろからいかなばならない。

戦略にはまず基本的に数が必要である。最低限の戦力がなければ戦争以前に交渉すらできない。これがこの電脳空間の弱肉強食の部分である。そのため志風は自分の人脈ではなくどこか戦力のある国へ仕官し、その戦力を持つて戦略を仕掛けようとした。

そして戦略性の優れる金剛が有利に戦況をすすめつつあるのを志風は看破しており、その戦略拠点を手吹国へと求めた。

もしこれが朱璃であるなら国家と君主を傀儡化する行為であると認識し、このような志風の実行はしなかったであろう。しかし志風はこの戦略を自分がとらないと金剛の統一はほぼ決まってしまうであろうと言うことまでもが分かっていた。

志風「恐らく世間は私のことを国家を乗っ取り君主を傀儡とする腹黒い男と見るだろう。しかし私はその言葉を甘んじて受けよう。体裁を気にして実を失ってしまつては何になるうか。このままでは恐らく金剛一極化の世の中になる。私が悪役になることでその一つのアンチテーゼとなるなら、私は鬼でも悪魔にでもなろう。」

世間の一部は志風を恥も誇りも知らない人間と思い、尊厳元帥・朱璃とは対照的な人間と見ていた。しかし朱璃の誇りとは世間体を気にしたものではなく、彼の純粹なる本心から迸る魂のようなものであった。そしてまた志風のこうした考えも偽り無き心であり、世間的には悪と思われていることでも実の部分ではそうではないこともあり、そこを志風はよく捉えていた。

局所的に見ると悪であることも大局から見るとそうではないことが

ある。主義と主義がぶつかることで一方から善悪が作られることもある。そうした主義に囚われることなく柔軟な思考を持ち合わせていたことに志風の人間性の深さを感じさせられる。それ故に人は彼のことを清濁宰相と呼ぶのである。そして今、その男が始動した。

志風が山吹国へ仕官しました。

【山吹国国宛】

志風「仕官しました、志風と申します。こちらの鯖は初めてで不慣れなところもあるかもしれませんが、どうぞ宜しく願いますw」
王廉【君主】「志風殿、ようこそいらっしやいました。宜しく願います^^」

紅葉「これはお久しぶりでございます志風様^^夢幻鯖でお世話になりました、紅葉です。またお会いできるとは嬉しい限りです」

志風「これはこれは紅葉さん、ご無沙汰してます。あの時はどうもw」

王廉「紅葉殿は志風殿とお知り合いでしたか^^」

紅葉「はい、志風様とは一度他鯖で一緒にすることがあり、その時の対三国同盟による四力国包囲網は本当にお見事でした。それは今もその鯖では伝説となっていますw」

紅葉と志風は一度、他鯖で共に戦った間柄であった。そして偶然にもまたこの山吹国で再会を果たした。

紅葉がそこでみた志風の戦略とは神憑りのなものであり、その夢幻鯖では紅葉の言うように伝説として住人から住人へと語り継がれていた。

それは中盤ラス7国の状態であり、その7国のうち三国が同盟を組んだことが傭兵や割譲などから予測できた。そしてこれを逸早く知らせ四力国を纏め上げたのが志風であった。

二国間でも利害関係によって交渉が纏まらないこともあるにも関わ

らず、志風はこの四力国を一瞬にして纏め上げた。その経緯はこうである。

夢幻鯖では国宛以外の個宛ログ等を正式外交とは認めない慣習があったが、志風はこの慣習を度外視して四力国の幹部をチャットに集め、このチャットログを正式外交として定めたのである。

外交とはそもそも信頼関係によって成立するものであるため、それが信用に足るものであるか否かによる。そして彼が纏め上げた内容はどの国にも利益が偏らずその当時の出来得る限りの平等なものであったとされている。

このときの志風的外交姿勢は決してその国の代表としての立場ではなく、自国の利益を主張したものでないことを伺わせ、これを他国首脳部も感じ取った故に国家間の利益配分を全て志風に任せた、といった異例のものであった。

三国同盟側は戦略の先手を取っていると思っていたが、志風の四力国包囲網が余りにも異常な速さで進んだため、これが逆転して遂に四力国側から仕掛けるような形となった。

それはどの国がどの順番でどの国へ破棄をするか、どの侵攻ルートを進めるかなど綿密に計画されたものであり、この戦略の計画の殆どが志風が練り上げたものであり、その手順やルートは理に適ったものであったという。

この志風の非の打ち所のない戦略と公明正大な利益配分から、他国の者も当時志風の所屬していた春風国を盟主として仰ぐようになっていた。そして実質、この連合の号令を志風は天下にかけることとなり、見事敵側であった三国同盟を撃破したのであった。

王廉「私も志風殿のことは噂でかねがね聞いております。お恥ずかしながら、この国は私が諸事情により戦略が遅れております><;もし宜しければ国内指揮や外交の方を見て頂きたいです><」
志風「了解致しました、微力ではございますがやれるだけのことはさせて頂きますw」

山吹国の騎馬將軍・紅葉と知己の間柄であつた志風は、紅葉の選任もあり宰相としての職を与えられ、まず国内の統括に励んだ。

志風「まず会議室の整理をしましょう。自己紹介スレで人望と更新時間の書き込みを皆さんお願いします。それと人材なくして国は成り立ちません、登用スレッドを作りましたので各自登用もお願いします。」

志風「戦略についてのアンケートスレッドも作りました。この国の進路を皆さんで意見を出し合い決めていきましょう。」

志風「(さて、ここの仕官者は金剛国をどうみるかだ。この脅威に對して保守的に同盟を結ぶか、積極戦略にでるか。)」

志風「(保守戦略なら一時的に結ばなくてはいけないが、その場合戦略がかなり限定されてしまう。積極戦略なら既にもし他国が金剛と固まってしまうているなら、その他国にこちらが合わせるようにして足並みを揃え、すぐに参入できるような形で臨みたいところだ。しかし金剛国から先手を打たれたら滅亡は確実と言っている。)」

山吹国は君主の王廉を見るとONが低く、戦略の遅れから見ても仕官者は保守的な思考にならざるを得ず、国民は半数以上によつて保守戦略が選択された。一方の志風は積極戦略に出たかった。戦略とは先手を打つことが重要であるからだ。但しこの戦略決定は国民全体で決めていくことが大切な部分であることと、仕官してまだ実績もないことから志風も国民の保守戦略を取らざるを得なかった。

しかしこの国民の意見を汲み取りつつも、自らの構想を戦略として修正・再構築していくのが志風の優れた部分であつた。自分の意見を主張するときに、まず相手の意見を引き出し、その考えを理解した上で自分の意見に誘導させていく手法を敵味方問わずよく用いた。そしてこの志風の戦略は戦時中破棄不可の同時破棄から同時開戦と言う形で見事金剛国から戦略的に先手を奪うのであつた。

破棄不可を結ぶ保守戦略から一転して同時破棄と言う積極戦略へと
一気に向かうこととなり、山吹国と黄河国、この二国による共闘戦
略が金剛国へと今まさに迫ろうとしていた。

第十九話『連合』

志風@山吹国「国宛失礼します。弊国は36年1月をもちまして貴国との条約を破棄し、同時に宣戦布告申し上げます。開戦は44年1月となります。お相手の方、どうぞ宜しく願います。」

36年1月、この一報の国宛が金剛国を震撼させることとなった。そしてその後、間髪をいれずに黄河国の元帥・朱璃から条約破棄・宣戦布告と言う予想外の国宛が金剛国に通達された。

金剛国は豊かな中央部4都市を支配し周囲の外交を固め内政期間に入っていた。そこへの同時破棄は流石の金剛も血の気を失った。

紅葉「志風様、お見事でございます。流石の一言ですね、これはもう」

志風「いえ、同時破棄なんてのは戦略としてはナンセンスなんですよ。」

紅葉「それはどういうことでございますか？」

志風「戦略には長期的展望が必要です。私がした同時破棄は既に外交の選択肢が殆どなかったからなんです。つまり共闘をするなら本来は破棄不可をつけませんし対象国への不可侵猶予期間も同盟国と合わせていきますねw」

紅葉「しかし金剛国は破棄不可を断ると攻めてくるのではないでしょう。それを各国は恐れて。」

志風「それは各個に結んでしまうからでしょう。周辺国が大国よりも早い段階で各国警戒をしていけばそれを結ばずに済みます。各個に結ぶから撃破されていってしまうのです。」

紅葉「なるほど、勉強になりました。しかしもう勝ったも同然ですね、してやったりですw」

志風「それはまだわからないですね。50vs30+35、共闘の

困難なのは二国に兵力分散してしまうことにあり、これがまだ各個撃破の範囲にあることです。」

紅葉「つまり時間差で50vs30、50vs35にされた場合があるということですね。」

志風「仰る通りです、紅葉さんwその場合は相手本体に攻撃を両国で加えていく、本体以外の領土は無視してどんどん進軍していけば50vs65で戦力的には上回ることができるんですw」

紅葉「その場合は数の上からしてこちらの連合有利ですね」

志風「ですね」wしかし相手もそう簡単にはさせてくれないでしょうね。恐らく一方を堀化と守備、一方を一斉攻撃で各個撃破にすることがでしょう。」

紅葉「とすると人数の少ない当国側が狙われるでしょうか？」

志風「はい、恐らくはそうなるでしょう。ですからまずこちらは護衛などの守備系兵種で徹底守備、黄河国が進軍して一気に敵本体を急襲してもらう形になると思われます。」

紅葉「それならやはりこちら有利と言う感じはしますね 徹底守備なら数ターンは持ちますし、攻撃側があのだ元帥・朱璃様なら本体を一気に強襲できましょう」

志風「私もそんな感じで想定しています。しかし油断は禁物ですよw『窮鼠猫を噛む』と言いますしw」

紅葉「『背水の陣』って言葉もありますしねw」

志風「背水の陣・・・そうですね背水の陣か・・・言葉のニュアンスはやや違いますが、注意ですねw」

【金剛国・幹部チャット】

金剛「ええい、何たることだ。朱璃はしっかりとマークしておけと言って置いたはずだ。埋伏の毒はどうしたのだ！」

石黄「潜入させておいたのですが余りにも同時破棄が迅速であつたため対応ができませんでした。申し訳ございません。」

金剛「何のために人員を割いたと思っておるのだ！それを活かせな

いのならマイナスでしかないぞ。その武将は放置削除後に名前変更をして当国に再仕官をさせるのだ。」

石黄「わかりました、すぐにでも手配を。」

金剛「それにしてもあの志風と言う男、何と食えぬ男か！破棄不可を快諾したと思えば同時破棄と来たか！そしてあの朱璃までもが！」

石紅「数の上では我が方はやや不利でございますね、そして相手はあの元帥・朱璃・・・」

金剛「領土数・人数からまず撃破し易い山吹国を狙うのだ。黄河国に対しては許昌を少数守備で撤退後に堀力ウンターとする。これが基本戦略である。」

石紅「御意にございます。」

外交の情報漏洩に関しては志風にとって想定範囲であり、黄河国側が了解をする直ちにその戦略を開始したのであった。そしてこのタイミングに関しては朱璃も認めるところであり、両国の足並みは揃っていた。

それに対する金剛の戦略は黄河国に対しては守備、山吹国を攻撃として各個撃破を狙ったものであり、これは金剛も歴戦の名将らしく理に適った考えであった。

しかしその戦略はもちろん朱璃・志風の想定するところであり、それに対応すべく対策を既に練っていた。

<http://muhu.web.fc2.com/map/collection-kongou-kyoutou.htm>

【会談チャット】

志風「元帥は今回の戦略をどのようにお考えでしょうか。」

朱璃「恐らく金剛としては人数・領土共に少ない貴国をまず狙い各個撃破にくるでしょう。そこで貴国が守備、当国は攻撃、これを基本戦略とすべしと私は考えております。」

志風「私も元帥と同意見でございます。現在の滞在数を見ましても宛に40名、許昌に10名となっております。狙いが当国に向いているのは明らかでございます。」

朱璃「そのようですね。そして現在、許昌の農民数が減っておりますのでここは既に堀として捨ててきてるでしょう。恐らく宛からはカウンターが組まれていると思われます。」

朱璃「また君主である金剛、国政を司る三人衆の三賢石、副軍師の法真など主だった将は宛に滞在なのでいずれかの将が本隊を抱えていると思われます。」

志風「なるほど、そう考えるのが妥当でございましょうね。そして弊国は貴国が許昌に進軍するまで守備で粘れるかどうかにあります。」

志風「ただ、不安要素としては文官の資金面です。当国はここまでの戦略が遅れており未だ二国、満額が出ておらず資金差は中央四力国を支配する金剛国とは差がでます。」

朱璃「資金差・・・ですか。」

志風「2ターンは文官は神鬼でも守備に着く形で耐え切れと思うのですが、神鬼は高コスト故現在の収益では再徴兵できるかどうかと言うところ。敵は豊富な資金を利用できるため3ターン目は再徴兵が可能、こちらは文官は雑1守備しとなり4ターン目から戦力差が発生し危険になります。ただ、それでも総体と見る場合、こちらが有利には変わりございませんね。」

朱璃「ううむ。それなら必勝を期すため当国は1ターンの先行入力で許昌に一斉、その後ON攻撃と言う戦術を取りましょう。これなら前回のデータ通りいけば1ターン目でほぼ壁の半分まで到達、2ターン目で恐らく許昌は陥落となる計算です。」

朱璃「開幕一斉の攻撃枚数と戦果を確認して2ターン目で部隊移動、3ターン目に宛に圧力を掛けることで貴国の不安要素はほぼ皆無となることでしょう。」

志風「しかしもし仮に敵が基本戦略を変更して貴国へと攻撃を向け

た場合、先行入力は1ターンであつても危険なのではないでしょうか。」

朱璃「確かに先行入力にはリスクはあります。しかし先ほど言いましたように情報によつて許昌は堀化であることが予想されるため大軍を置く場合、一斉を当国にして陥落させたとしても再徴兵はそのターンにできません。そしてこちらにも後方に移動して再起を計ることは十分可能でしょう。」

この朱璃の考え方は敵が基本戦略を変更する兆しが見えた場合、戦術的な対応でその場を凌ぎ後に戦略を再構築する言つたものであつた。

志風・朱璃の両将の基本戦略の考え方は同じであつたが、朱璃の戦略はリスクを抱えつつも大胆にも先制攻撃を仕掛けることにあり、ここが志風とは違う部分であつた。

しかし志風はこの朱璃の戦術レベルでの対応があることを確認したためそれ以上は追及することはなかった。

志風「（こちらの基本戦略の見直しが生じた場合、先行入力はリスクがある。しかしそれは敵も基本戦略を見直す場合はそれなりのリスクが生じる。）」

志風「（そして戦術レベルにおいても再徴兵不能と言う部分があるため後方に打通も不可能であるため、ここで戦術的な対応できる形となる。）」

志風「（その間に拠点を建て直せば再び戦術レベルではこちらは優位に立つことができる、朱璃殿はこのようにお考えなのであろうな。）」

朱璃「（穴は無いはずだ。今度こそ決着をつけようではないか、金剛よ！）」

そして金剛国 v s 黄河・山吹連合の開戦の時は来た。第一期、実質上の決勝戦であつたとされる戦いである。

第二十話『敵に敬意を』

電腦歴第一期43年7月・・・

朱璃「許昌の情報を随時教えてくれ。」

夏侯瑜「許昌は滞在・守備枚数変わらず10、農民数残り5000から1000へ減少。」

朱璃「次の44年1月で農民0か。まず許昌は堀だろう。」

夏侯瑜「ああ、恐らくな。」

朱璃「全軍に告ぐ。既に指令にあるように最初の1ターンのみは許昌出兵を先行入力！その後は守備しになるよう入力を！」

朱璃「敵兵種は守備のため護衛を多く投入してくると思われる。それに対するため徴兵は騎馬推奨である。但し資金の無いものは兵種相性の発生しない雑兵を。」

朱璃「許昌を維持と同時に遊撃で宛に攻撃を入れていく！許昌守備が固まったら宛に一斉！この戦いは敵本体を埋めれば勝ちである。」

朱璃「夏侯瑜は一応カウンター対策として後方の陳留に残ってくれ。先に俺の部隊で許昌に入る。許昌堀の場合、お前の部隊で徴兵することになるだろう。」

夏侯瑜「了解した。しかしそうなると44年7月まで現地徴兵は無理だし農民1万を超えるのは更に1年後になりそうだ。」

朱璃「そうだな。まず最速ターンで宛に隣接することが最重要になる。これがクリアできないと山吹国が撃破され連合側は敗北だ。それを回避するためにこの1ターンのみの先行入力は意味がある。そこからは短い周期でON一斉によってプレッシャーを掛けていく形とする。」

遊鈴「遊撃ならまかせておけよなwへへw」

朱璃「遊鈴、今回はお前に期待しているぞ。いかに速く許昌に進軍しそこから宛にプレッシャーを掛けるかが重要になる。」

遊鈴「任せてくれよwこれで手柄立てて階級アップだぜw」

夏侯瑜「功を焦るなよ、遊鈴。カウンターされて拠点化が遅れたら何もならんからな。最低限の維持は忘れるなよ。」

遊鈴「それくらい俺にもわかってるってw俺の臨機応変の用兵を見せてやるぜw」

この朱璃の情報分析による1ターン先行入力は用兵としては正確を極めたものであったとされている。

しかし43年12月事態は一変した。

夏侯瑜「おかしいぞ！滞在が増えている……。今度は許昌に40名以上の滞在を確認……。どういうことだ、これは。」

朱璃「なんだと！民忠はどうなっている？」

夏侯瑜「俺の更新時間10分で陳留移動完了。その時点で民忠0から30へと上昇していた。」

朱璃「まずい、これは陽動だ……。全軍先行入力を解除！一斉攻撃は中止で守備に切り替える！兵種は護衛に変更を！」

朱璃「夏侯瑜は山吹国へ現状説明の外交文を入れてくれ。」

夏侯瑜「わかった。」

朱璃「先行入力が止まらない可能性がある。敵は先行入力がされての陽動だろうか……。最悪のパターンを想定すると1ターンでも陥落がありえる。その場合、打通される可能性もあるので一端退いて体勢を立て直すことが必要となる。」

胡弓コキユウ「これはやはり情報漏洩してるんじゃないでしょうか？月光国の時もそうだと思いますがその可能性が高く思われます。」

電腦掲示板や一部の噂レベルであるが金剛の完璧すぎる戦略の裏にはスパイをしているのではないか、と言う疑問が囁かれていた。

それは確証できる根拠はないのであるが、序盤に金剛国は長安の月光国と18名vs20名のほぼ同数の戦いとなり、これは双方壁も

高いことから膠着戦になるかと思われた。しかし結果は予想に反して金剛国の圧倒的な勝利に終わったのであった。

この戦いは金剛の戦術レベルの高さを再度認識させるものでもあったが、不可解な部分もあった。

それは月光国が一斉攻撃を指示すると決まってその一斉ターンの前に金剛国から一斉が来ることであった。このような形で一斉が数度潰され月光国は攻勢に出れずそのまま滅亡となってしまうたという話である。

この不自然さに気づいたのは月光国弓將軍・胡弓であった。しかしそれが分かっても何の対策も打てずに滅亡となってしまう、それに解せない月光国の仕官者の半数以上はリベンジのため金剛国と対しそうな国へと流れた。その中で前期から因縁ある朱璃の滞在する黄河国もその有力候補の一つと見られ、ここへもその一部が流れたのであった。

逆に金剛国の国民は金剛の力を評価し『完全無比の皇帝』と賞賛したのである。このように人間は立場が違えば見方も違ってくる。歴史に史観があるように、この電腦空間においてもしかりである。ここに温度差が生じてくるのは当然のことなのかもしれない。

実際のところどうであったかであるが、この金剛のスパイ活動は三賢石の一人である石黄によって行われており、この記録は彼の残した文書によって確認できる。それによると、この月光国へのスパイが金剛の最初の活動であったことが確認されている。

胡弓「かの国の卑劣なスパイ行為に私はもう我慢なりません。目には目を・・・といいます。こちらで埋伏をするか、この疑惑を各国に呼びかけて包囲網を組むなどしてはどうでしょうか。」

朱璃「胡弓殿、お気持ちわかります。しかし金剛国が国家としてスパイ活動をしている確証はございませんし、もし仮にしていたとしても当国が同様の行為をしてしまうようでは当国としての行動理念は他国に基づくことになってしまいます。」

遊鈴「相変わらず兄貴は堅物だな。けど夏侯瑜みたいにサディスティックじゃないからいいかww」

夏侯瑜「性格がサドで悪かったなあwいつも守備と偵察ってマゾ行動してるから心の面でバランスとってるんだよwお前に対して限定でな、遊鈴w」

遊鈴「俺に集中攻撃でストレス解消なのかよおwwひっでー話だなあ、おいwwww」

責任感の強い朱璃は暫し、深刻になりそして肉体的にも負荷を掛けることが多かった。そこで決まって遊鈴は茶化するのであるが、これは彼が楽天的な性格の部分もあるのだが、これが彼なりの表現方法であった。

彼は後年、手記の中で「俺は朱璃に本当は無理をしないでくれと言いたかった。」と本音を語っている。

朱璃「自らを律することができからそこ、もしそのような確証があった場合において非難もできるのではないだろうか。」

胡弓「しかし疑惑はあります。それを考えると元帥、貴方は金剛を憎くはないのですか？ 電脳掲示板に貴方の中傷を書き込んでいるのも金剛或いはその手の者の可能性は高いですよ。」

朱璃「もし胡弓殿の仰ることが真実であつたとしても私は戦う相手には最大限の敬意を表したいのです。この電脳空間の戦いとはリアルの争いように憎しみ合うものではなく、お互いに尊敬し合うこと、それを私は理想としたい。」

胡弓「ではスパイが発覚した場合でも貴方は彼を尊敬できますでしょうか？」

朱璃「その時は正々堂々とこの朱璃の全知全霊を持って潰すことをお約束します。そのためにも胡弓殿、我が国にお力をお貸しください。」

胡弓「そこまで仰るのですしたらこの胡弓、不才の身ではございます

が精一杯働かせて頂きます。」

この電腦空間では幾多の戦争が行われていたが、その都度電腦揭示板は荒れ、国家や個人に対しての罵声や中傷が頻繁に飛んだが、元帥・朱璃は終始彼の最後を迎える時まで紳士的であったと言う。

朱璃「（俺はまだ一度として負けたことがない。しかしもし戦争に敗北をしたとき、その戦った相手に心から俺は尊敬できるのであるうか。）」

彼が取り乱して怒りの感情を顕わにしたのは公式ログとしては一回のみであった。それはまた後の話となる。

第二十一話『宇宙開闢』

春、それは全ての生命が芽生える季節である。

桜の下で酒を酌み交わし誓いを立てる三人がいた。朱璃・夏侯瑜・遊鈴である。

彼等の一步はこの桜の木の下から始まった。

「我ら三人、生まれた鯖は違えども、願わくば同じ鯖にて死ぬ事を誓うー！」

この三人の誓いが後に将星流転鯖に大きな影響を与えることとなる。世に言う『桜花の誓い』である。

一番年上なのが朱璃であったことから朱璃を長兄として、または総帥役として夏侯瑜・遊鈴は慕ったのであった。

朱璃「国には理念がある。もし俺が国の理念に背く時があれば遠慮なく俺を殺してくれ。」

遊鈴「こうやってると何か三国志演義の『桃園の誓い』みたいだなw年齢からして朱璃の兄貴が劉備、夏侯瑜が関羽、俺が張飛ならまず最初にくたばりそうなのは夏侯瑜だって話だwww」

夏侯瑜「勝手に人に死亡フラグ立てるなよなwそれより遊鈴、お前が張飛ならいいんだが呂布になるなよwお前は女に関して節操がないw」

遊鈴「貂蝉みたいな美女がいたらの話だがなw」

朱璃「十年、二十年、三十年後も生きていたらまたこうして酒を酌み交わしたいものだな、夏侯瑜、遊鈴。」

夏侯瑜「ああ、そうだな。」

遊鈴「俺は出世していい女ゲットしてだなあw兄貴たちばっかと

つるみすぎると後世の奴等に『ウホ やらないか』とか言われても困るからなwww」

夏侯瑜「やれやれ・・・w」

遊鈴「『希代の名将・遊鈴は万の敵を斬ったが更に驚くべきは斬った女の数であつた』とwもちろん『斬る』つてのは前者後者で意味は違うぜw」

朱璃「あははw」

この時のことを遊鈴は晩年になるまで記憶しており「自分は再び三人で酒を酌み交わすために戦っていた」と手記に記録があつた。

遊鈴「朱璃は常に仕官者のことを考え心を悩ませ、国家の危機においては肉体を酷使した。自分はその度に深刻にならぬよう冗談を言つてみせたが本音は違つていた。」

老人となつた遊鈴はこの話を人々に聞かせる度に涙を浮かべていたと言つ。

桜花散る中酒を酌み交わし、三人の話は続く。

朱璃「国家理念は国法に明記することでそれが有効となる。理想を思い描くだけではなく、それを明文化し行使していくことで体現が可能となる。」

夏侯瑜「もしその国が国法に奇襲国家として明記してある場合にはどうする。」

遊鈴「兵書に言うだろ?『速きこと風の如く、静かなること林の如く、侵略すること火の如く』つてなwガンガンやっちまえばいいのさw先手必勝〜!」

夏侯瑜「物事には陰陽のバランスつてものがある。静動一致と言うだろう。お前は『動かざること山の如し』の一文を100万回読み

返すことをオススメするw」

朱璃「俺は宣戦布告をして慣例に則り双方納得のいく戦いを希望する。しかし国家が奇襲を宗とするのであれば俺はその時は汚名を受けてでもそれに従うさ。」

夏侯瑜「下野はしないのか？」

朱璃「基本的にその国に仕官したら滅亡か統一を見届けるまで一仕官を全うする。もし君主が人の道を踏み外すなら諫めて正すようにしたいものだな。」

遊鈴「めんどくせーなーw」

朱璃「人には忍耐が必要だ。忍耐無き精神では理念を体现することなど不可能さ。それが国家と言う枠組みを作る。」

遊鈴「辛抱たまらん！じゃいけねーのかよw」

夏侯瑜「遊鈴は女を見ると見境ないwけどそれじゃ本命が出てきた時に逃げられるぞw」

遊鈴「そりゃー、困るw」

夏侯瑜「理想の女のためにだなあ、こう耐え忍んでこそ想いが伝わるのさw節操の無い男は嫌われるぞw」

朱璃「ははw」

遊鈴は個人プレー的な性分があつたが朱璃の言うことに時に不平を言いつつも従順であつたのは、この『桜花の誓い』があつたからであるとされている。

朱璃は国家理念を説いたがこの時点で遊鈴がそれを理解していたかどうかは定かではない。しかしその忠誠は国家にではなく朱璃個人に向けられていたであろうことは想像に難くない。

遊鈴が朱璃の思想・哲学を本当に理解できたのは、朱璃が存命している時期ではなく彼の死後であつたと言う。

朱璃に批判的な人は彼を国家主義者と呼んだ。しかしそのことについて遊鈴は後年、このように論じている。

「朱璃の行動理念とは国家理念に帰するところが大きい。そのため国家主義として批判を受けることもあった。しかし個人を犠牲にして国家を存続させるようなことを彼は決してよしとしなかった。そしていつも犠牲となっていたのは彼自身であった。」

「朱璃の言うところの国家理念とは個人を縛ると言うものではなくその真なるは、プレイスタイルの多様性を認めつつもその指標を示すものであった。但し、朱璃本人はそれを先頭に立つて示す立場にあったため、暫し戦略においての考え方を硬直させる部分があったことは否めない。」

この遊鈴の言葉は同時代に生きた人の中で最も朱璃の姿を捉えているものであるとされている。遊鈴の朱璃への評は決して神格化するものではなくその真実をよく捉えており、その偉大なる業績を称えつつも彼の限界点を指摘していた。

この朱璃・夏侯瑜・遊鈴の三将における宇宙開闢の原点には個人レベルでの友情と国家レベルでの理念との間での葛藤があったのかもしれない。

第二十二話『撤退戦』

異変に気づき黄河国から山吹国へ国宛が入ったのが43年12月のことであつた。

【外交】

夏侯瑜「・・・と言うことでございます。」

志風「了解しました。で、元帥殿は何か仰っておりますか？」

夏侯瑜「入手した情報を伝えて欲しい、それだけでございます。ただこの金剛国の動きは陽動ではないか、とは言っております。」

志風「そうですか。私も陽動かと考えます。今からこちらは攻撃命令を出しますので、そう夏侯瑜殿から貴国にお伝えくだされ。」

夏侯瑜「ご配慮ありがとうございます。」

志風「（金剛国は基本戦略を変更してきたのであろうか・・・それともこれを最初から計画していたのか。もし後者であるなら何と大胆な。）」

志風「（しかし仮にそうであつたとしても朱璃殿は追い込まれても建て直し、こちらが攻勢に出ることで再び戦略を再構築することは可能ではないか。ここで焦りは禁物だな。）」

【山吹国宛】

志風「基本戦略を守備としていましたが、どうやら金剛国の狙いは黄河国のようです。そこで今度は当国が攻撃することに急遽変更となりました。」

志風「現在、守備系の兵種である護衛兵を徴兵している人が多いと思いますが、壊滅後は相手兵種を見てアンチ徴兵をお願いします。」
紅葉「了解しました。」

44年1月、金剛国vs黄河・山吹連合の戦いが始まった。

当初の連合国側の予想は山吹を金剛国は各個撃破すると思われていたため山吹国は守備、黄河国は攻撃となっていたが、状況の変化によつて両国は基本戦略を変更せざるをえなかった。

黄河国は守備へと切り替えたが、統制のとれた黄河国の将兵たちと言えども万能ではなく、先行入力20枚の内で解除となったのは半数の十数枚であつた。それに対して金剛国の一斉攻撃の枚数は35枚と言う驚くべき攻撃枚数であつた。

【黄河国宛】

朱璃「くう・・・！この枚数は先行入力に間違いない。とするとやはり陽動であり金剛国の狙いは当国であつたか！」

夏侯瑜「味方守備全壊！陳留城壁露出！これは1ターンぎりぎり持つか持たないか・・・」

朱璃「こちらは守備壊滅による空出兵が目立つな・・・。今は守備に徹し同盟国が宛を落とすことに期待するしかない。」

遊鈴「守備って言つても先行入力がとまんねーんだよwwそれよか12月の諜報では許昌は守備薄かつたから壁見えたらこちらにも攻勢に出たらいかんのかい？」

朱璃「許昌は城壁値900以上、こちらは650、今から打ち合つても恐らくこちらが負ける。」

夏侯瑜「もう壁も持たないな・・・！」

馬翔「こ、これはまずいのではないでしょうか？」

朱璃「大丈夫です、一端広陵に後退して建て直しを計りましょう。

私の部隊はこのターン広陵移動します。更新の早い遊鈴部隊は一応寿春に向かつて待機をしてくれ。」

遊鈴「任せとけーw」

朱璃「守備はよりもカウンターを優先です。守備は壁とOFF守備しがあるので大丈夫です。まずはカウンターを狙いましょう。」

郭明「（流石は朱璃じゃ、この状況でも全く動揺の色が見えぬ、指

示も的確じゃ。しかし相手の作戦も見事wもうわしの時代は終わったのうw)」

【山吹国宛】

志風「金剛国の攻撃が同盟国の黄河国へ向けられております。当国は打って出ますのでONした方から宛に攻撃をお願いします。」

紅葉「すいません、兵種相性が悪くなかなか突破できません！」

志風「言うことはあちらは騎馬で守備をしてきているのですか。」

弓徴兵に切り替えて突破を計りましょう！」

紅葉「了解です！」

金剛国の都市である宛の騎馬守備に対して当初、守備予定の山吹国は護衛徴兵になっていたため兵種相性が合わず、苦しい開幕戦を強いられることとなった。

一方、黄河国であるが、1ターン目は城壁を削られながらも緊急守備によって何とか持ちこたえたものの、2ターン目二月には遂に金剛国の陳留支配を許してしまうこととなった。

2月：金剛国が陳留を支配しました。

この両国連合側の状況については想定内のことであり、特に黄河国は建て直しが十分可能であると思われるのであるが、3ターン目の三月、予期せぬ事態が起きた。

間髪入れず3月、広陵に金剛国からの攻撃が入ったのである。

朱璃「なぜ3月にこれだけの枚数の攻撃が入るのだ……。金剛国とはこれほどまでにONの高い国であり、俺の認識と判断が根本的に間違っていたのであろうか……。」

朱璃は前回の月光国とのデータを確認したが、通常の1ターン毎に

よるON攻撃枚数を見ても理解できない程の枚数であった。これは『窮鼠猫を囓む』のような追い詰められた心理作用や狂気が齎したものであるとも考えたが事実は違っていた。そしてその驚くべき事実を知るのもう少し後のことであった。

3月：金剛国が広陵を支配しました。

1月、朱璃の本隊が広陵移動、2月に集合が掛かる。その矢先の広陵陥落であり、黄河国は金剛国に打通を許してしまった。そしてここにきて諸将の意見が分かれた。

朱璃「まずい・・・、全軍遊鈴部隊に所属、OFF守備がもう恐らく数枚陳留には入っていると思われませんが、ここは思い切って陳留カウンターでどうでしょうか？」

夏侯瑜「朱璃、現在は陳留の諜報がないため敵のOFF守備Lを乗り越えるのに失敗した場合、それは諸刃の作戦になるぞ。」

胡弓「私も陳留カウンターはリスクが大きいと考えます。確実に広陵カウンターを入れ、こちらもOFF守備Lを復活させ、再び対峙するのが修正案ではなかったでしょうか？」

夏侯瑜「敵主力を埋めることは両国の圧力で行うと言うのが当初の基本戦略でもあり、ここで単独に戦術レベルで敵主力に打撃を与えるのはどうかと思うんだよな。」

遊鈴「俺は兄貴の意見を支持するぜw基本戦略だって当初のものと違ってきているし、戦術においては秒単位で変更だってあり得ると俺は思う。予想外のことが起こっているんだから、思い切った戦術を取るのもいいんじゃないか？」

朱璃「この選択は黄河国だけでなく同盟国である山吹国の命運も掛かっております。最終的な判断は君主に仰ぎたいと思います。」

実績・実力共に評価された朱璃は黄河国において絶大な支持を受け

ていたが、ここで初めて反論が多くでた。

これは金剛国からの異常な打通への説明をつけることができなかったからである。説明が不能の場合、偶然の要素が大きいようにも思えこれ以上の打通はこないのではないかと言う楽観論も出た。

しかし中盤だけで広陵が陥落しており、データの面では更に打通が続く可能性もあり、偶然であると保証する根拠もなかった。またそれらを説明する時間もなく、一歩間違えれば滅亡の危険性もあることから最終的な判断は君主・馬翔に委ねられた。

馬翔は初心者であったが、君主には代わりない。そして国民の意見も分かれた今、朱璃だけの判断では国を動かせる状態ではなかった。そして馬翔の出した答えは陳留ではなく広陵力ウンターの安定策であった。

朱璃は一抹の不安を抱えつつもこの案に修正を提案した。本隊を城壁値のある寿春に移動するというものであり、状況を見て部隊所属者の招集を計るものであった。これには仕官者は納得し採用された。

3月：山吹国が宛を支配しました。

44年3月、広陵陥落後のすぐ後、黄河国に吉報が齎された。山吹国が宛を陥落させたのである。

山吹国は護衛兵で1ターン目に攻撃を宛に入れ、宛の騎馬守備によつて壊滅させられ阻まれてしまった。これは兵種相性が悪いことと急遽、戦略変更したためON攻撃となつてしまい先行入力が出来ず、そのため攻撃枚数が揃わなかったことにあつた。そこで相性の良い弓兵に2月は再徴兵し、そしてONも多少増え3月に何とか陥落まで持ち込んだのであった。

【黄河国宛】

志風@山吹国「国宛失礼します。先ほど宛を攻略したことをご報告

申し上げます。現在、貴国は苦しい状態ではございますが、弊国が許昌に出るまで何とか持ちこたえてください。」

馬翔「同盟国が宛を落としたのですね、こちらも頑張りましょう！」
夏侯瑜「敵は広陵で壁壊滅してますので4月はこちらが有利だと思われます。ここから立て直しでしょう。」

しかし予想に反して3月後半まで金剛国の異常とも言える打通は継続し、その矛先が次は寿春に向けられた。

守備の少ない寿春は一瞬で城壁露出し、その城壁ももはや金剛国の攻撃に耐え得る程の数値を有してなかった。残り一国、城壁の低下は滅亡の秒読み段階を意味する。

この時、朱璃はその責任感の強さから指揮官としてではなく自らも一部将として最前線で戦った。そして朱璃自身、この戦いが最初で最後の敗北になるであろうと感じていたのである。

無数の矢傷を受けたことと、40年戦争からの体力が回復しておらず、朱璃は吐血しその場に昏倒した。

遊鈴「くそ！兄貴は死ぬ気かよ！ちよつと俺は部隊があるからいけねえ。胡弓さん、朱璃の兄貴を頼むぜ！あの人、城を枕に討ち死にとか馬鹿なこと考えてるぜ、きつと。」

胡弓「了解しました、必ずや元帥殿をお守りしてみせます！」

胡弓の軍も半数以上が壊滅状態であり、気を失っている朱璃を連れ出すのがよつとのことであったが、相手の追撃を受け胡弓の軍もほぼ壊滅状態となり、周囲には少数の旗本しか残っておらず絶対絶命の状態であった。

そこに現れたのが夏侯瑜の守備部隊である。

夏侯瑜「胡弓殿は朱璃を頼みます。殿は私がお引き受けしましょう。」

「胡弓「いくら貴殿が鉄壁將軍の異名を持っているとは言えこの人数では無理でしょうに。」

夏侯瑜「現在の所、一番守備に適しているのは私の軍です。それに階級は私が一番上なので命令には従って頂きます。どうか朱璃と残った將兵をお願いします。」

胡弓「わかりました、決して討ち死にするなどと言う馬鹿げたことは考えますな。生きて再び寿春の地で落ち合いましょうぞ。」

夏侯瑜「了解しました、必ず後を追から追いつきますので。」

胡弓「それでは・・・御免！」

第二十三話『軍神現る』

歴戦の名将である朱璃と志風、彼等の戦略構想がなぜこれ程までズレが生じたか。それはある男が関係していた。これは「第一期最大の不確定要素」といわれている。

黄河国・山吹国から同時破棄を受けた金剛国は苦しい立場に置かれていた。そして当初、金剛が選んだ戦略は山吹国をまず各個撃破すると言った無難な戦略であった。

同時破棄があつたのが36年1月、変化が起こつたのは翌2月であった。

亜沙羅「待たせたな、法真。」

法真「亜沙羅先輩、お待ちしましたよ。」

最大の不確定要素、それは後に軍神將軍と畏怖される亜沙羅の参戦である。

法真「やっぱりひどい格好ですね、先輩ww何とかありませんかーw会う度にひどくなつていく気がしますよw」

亜沙羅「今度は貯金も底をついたよwで、お前さんに雇ってもらおうと思つてなwそこそこ給料の出る役職を法真の力で何とかしてくれるとありがたいねw」

法真「あははw約束通り来て頂けて嬉しいです。」

亜沙羅は全体のゲームバランスを取ることを仕官基準としており、以前から朱璃・志風が手を取ることがあれば法真に力を貸すことを約束していた。

法真「取次ぎ役が乞食みたいなのが居るけど知り合いなのですか？

って聞かれましたよw」

亜沙羅「人を見た目で判断するとはひどい話だよ、全く。」

法真「そんな格好で仕官してくるのは先輩くらいですよwこの鯖ではまだ先輩は無名なんですから、少しは氣を使った方がいいですよw」

亜沙羅「いやあ、持つべきものは良き友人であり後輩だとつくづく感じたよw」

法真「はいw私の今ある権力の範囲で出来る限り精一杯先輩を推挙しますねw」

このような経緯から法真によって亜沙羅の仕官は上層部に直接伝えられ、正式に金剛国の仕官者として認められたのであった。

石黄「金剛様、今回推挙のあった亜沙羅と言う将でございますが、見た目はみすばらしいですし、電腦模試をさせたところ点数は合格最低ラインギリギリでございます……。このような者を一般的ならともかく重く用いてよいのでしょうか。」

金剛「亜沙羅と言う男については法真の推挙があった。あの麒麟児とも俊英とも称される法真が自己の才より数倍するとわしに申しておるのだ、認めぬわけにはいかんだろう。」

石黄「とは言え平時なら我が国にはいくらでも出せる給料くらいはございますが、今は有事、しかも国家の存亡が掛かっているこの時期にリスクが多き過ぎるように……。」

金剛「実際どれほどの男かはわからぬ。わしが直接会って確かめることとする。『人は石垣、人は城』と言うではないか。良き人材を揃えてこそ、天下統一の大事業も成し遂げれると言うものだ。」

石黄の意見は極一般的なものであった。また電腦模試も完全とは言えないまでも、成績優秀者はそれに比例して武勲も挙げており、その後の活躍の参考データとしては十分なものであった。

しかしこの金剛が名君であるのは、その一つの価値基準や見た目、もしくは人の噂等で個人の才覚を判断しないことにあった。ここが一般の人間よりも金剛が柔軟である部分であり、金剛は人材を集めることに労を惜しまなかった。

法真「謁見が行われます。その格好では流石に不味いのでちよつと準備を整えましょうか、先輩。着物はこちらで用意致します。」

亜沙羅「それはありがたい、宜しく頼むよ。それと腹が減った、もう3日も食べてないんだ。食べ物も頼むw」

法真「どんな生活してたんですか、生きているのが不思議ですw謁見は一週間後にありますので私の邸宅の一室をお貸しします、そこで少し英気を養ってください。」

亜沙羅「後、ついでにできれば酒もw風呂は明日の朝入るよ。」

法真「はいはい、わかりましたwその分、先輩にはたくさん働いてもらいますよwでは久しぶりに飲みますかw」

こうして再会した二人は酒を酌み交わし、法真は現状を色々と亜沙羅に説明した。

法真「・・・と言うわけなのです。君主・金剛はこれをまず山吹国を各個撃破に出る戦略を取る予定です。しかし山吹国は守備、黄河国は攻撃としつつこちらの本隊を序々に包囲殲滅してくると私は考えます。」

亜沙羅「なるほど、恐らく事前の偵察も十分にされるので戦略は見抜かれ、対応されるだろうね。そして相手は名将と名高い志風・朱璃。」

法真「で、先輩、どうなんです？いけそうですか？」

亜沙羅「戦略レベルで志風を出し抜き、戦術レベルで朱璃と互角以上に張り合うのは私もちよつと自信ないねw特に尊厳元帥・朱璃は無敗と聞く。一番ガチでやりあいたくない相手だよ。」

法真「戦略レベルではもうほぼ手詰まりの状態と私は考えます。そこでやはり国家レベルで規模の小さい山吹国、個人レベルでは朱璃を避ける、これを基本としていくしかないように思えます。」

亜沙羅「戦略が光る名宰相の志風だが、戦術面でもこの人は恐らく優れているだろうよ。戦略と戦術が別個にあるはずがないんだ、戦略面が目立つ故に戦術面が評価されていないと見るべきだろうね。」

亜沙羅「元帥・朱璃だってそうだ。世間では朱璃の戦略は硬直しているとの評価だが、彼だって戦略は十分分かつているはずなんだ。硬直させるのは戦略眼がないのではなく、彼の精神面に帰するところが大きいだろう。」

法真「志風の戦術眼、朱璃の戦略眼、侮ることなかれ、ですか。肝に銘じておきます。」

法真「私は先輩こそ史上最大の将星であると信じてるんですけどね。その二将を倒すのは亜沙羅先輩を置いて他にないでしょう。」

亜沙羅「おいおい、待ってくれよ。信じるとか信じないとかって、用兵つてのは信教じゃないんだからw」

亜沙羅「戦略レベルでは国数・武将数・内政値・条約、戦術レベルではON数・兵種相性・資金・訓練値等の要素が冷徹にそのまま出る。これが魔法のランプから戦力が無限に出たり、神が奇跡を起こしたりと物語のようにはいかなからなあw」

法真「戦術面ではON・兵種相性など多少ですが偶然の要素は十分見込めますが、戦略にはそれが入る余地はないですからね。」

亜沙羅「それが用兵の常識だね。しかし常識があるからそのアンチテーゼを出すこともできる。それが奇策と言うものさ。」

法真「先輩は奇策については以前からやや否定的でなかったでしouxか。」

亜沙羅「それは偶然の要素を多く期待する場合の奇策だね。この電脳空間でも幾度となく奇策が用いられたが成功したのはほんの僅かなものさ。」

亜沙羅「兵書に『彼を知り、己を知れば、百戦して危うからず』と

言う。私は朱璃の用兵を知っている、そして朱璃は私の存在すら知らない、ここに隙ができるね。まあ私の策が用いられるかどうかはこの君主次第だ。」

法真「そこは私からも進言しますので。」

亜沙羅「そして『城を攻めるを下計、心を攻めるを上計』とも言つ。相手の戦略・戦術が正攻法であるなら、それに対応していけばいい。これらは皆、古来から言われていることであり、条件を満たせば奇策も単なる偶然を期待するものではなくなるだろう。」

法真「『兵は詭道なり』ですね。」

油や土埃に塗れた全身を洗い清め、髪を梳かして結い、衣服を代えた亜沙羅の姿はどこか気品を感じさせ丸で別人のようであった。

黒ずんでいた髪の毛は美しく黄金に輝きを放ち、肌は透き通るような白さであり、周囲の目をよくひいた。その中性的な容姿から女性と見間違える人も居たと言う。

体格はそれ程大きくないにしても武芸に通じ、筋骨隆々でないものの豹のようにしつかりと引き締まった体は立派なものであった。

切れ長の青い瞳は、どこか知性を漂わせ、その姿は知友兼備の将であることを十分感じさせた。

戦時の亜沙羅は漆黒の鎧を身に纏って戦った。『白銀の元帥』と呼ばれた朱璃が銀色の鎧と白い法衣に身を包んだのは、将兵達に陣頭指揮を示すためであると言われていたが、亜沙羅が漆黒の鎧を身に纏っていたのはそれとは逆に地形や暗闇に身を隠す意味があったとされている。

亜沙羅は深夜のOFF一斉攻撃を得意としており、その漆黒のイデオタチは亜沙羅直属の将兵全てに統一されており、暗闇に紛れて襲い掛かる軍団は多くの敵将を畏怖させた。後世に長く語り継がれた亜沙羅率いる『漆黒の兵団』である。

孫子には『風林火山』と言う有名な一節があるが、これには続きがあった。

「・・・知り難きこと陰の如く、動くこと雷震の如し（軍争三より）」

纏っている漆黒の鎧は亜沙羅の金髪の輝きを際立たせ、それは闇の中を閃く雷光のようであったと、彼に従軍した将兵達は後々まで語り継いだのであった。

第二十四話『逸話』

亜沙羅の奇策を聞いた法真は、その神算鬼謀に感嘆を禁じえなかった。しかし奇策は奇策である。いくらそれが計算された策であったとしても、この鯖で実績がない者の奇策を受け入れるだけの度量の持ち主や理解者がどれだけいるであろうか。

そのため亜沙羅は自分の名前を隠し法真の名前で上奏するように言ったが、法真はこの智将の存在こそ表舞台へと立たせるべきと考え、亜沙羅の名前で献策することとした。

しかし、比較的柔軟性と度量のある金剛はよいとしても、セオリー通りの戦略・戦術を常とする三賢石を納得させることが可能だろうかとも思え、彼等によって反対され却下されることを心配した。

そこで法真は亜沙羅のこれまでの策略や逸話の幾つかを話し、彼が人物であることをまず示唆した。その中でも最も興味を引いたのがと紅鯖での兵糧攻めであった。

【紅鯖仕様】

・城壁は増築コマンドによって上限を拡大することができます。難攻不落の小田原城のような城も再現可能です。

・対城壁専用の兵種『攻城兵』が存在します。攻撃力：（通常）

知力×3＋書物（城壁時）、守備力：、金200

・弓兵は城壁に対して攻撃力が1.2倍となります。

・米相場は全国一律であり、米を売ると米相場が下がり、米を買うと米相場が上がる仕様です。但し先行入力によるコマンドのストックは不可能です。

・米相場は0.1～3.0まであり、1月と7月に変動します。国数が少なくても米転がして収入を稼ぐことも可能です。貢献は＋0なので気をつけてください。

・通常の米施の2倍の民忠を上げるコマンド「大量米施し」があり

ます。米が2000必要です。

- ・人望は鍛錬可能です。人望依存の兵科『人望兵』があります。攻撃力：人望、防御力：、米150

- ・訓練値に改造を入れました。訓練値は守備力だけでなく攻撃力にも加算されます。

- ・通常訓練の二倍の訓練値が上昇するコマンド「兵士特訓」があります。但し消費する米は2000です。

- ・訓練値50で徴兵できるコマンド「精鋭徴兵」があります。米が別途3000かかります。

- ・本サーバーは30分更新です。

このサーバーはフィクションです

亜沙羅と法真は同門の出であり、その粹狂塾では遠征研修として鯖巡りが行われていた。

上級生は下級生に戦略・戦術の見本を見せ、時には下級生がプレイするのは背後から参謀として上級生が支えるといったこともあった。この時、亜沙羅は伊佐久イサクと変名して登録しており、法真はそのままの名前での参戦であった。

ここで中盤以降まで残った小田原国と言うややネタっぽい国があったのだが、その名の通り、難攻不落の小田原城を再現しようとした国家であった。

小田原国は基本的に外交戦略によって生き残り、蓄財鍛錬なども十分であった。ネタ国と言えども十分その屈強さを感じさせる国であり、このこと対することとなった筑前国とは膠着戦となった。

司馬シバ覇【筑前国君主】「おみやーら、こりゃあ、長期戦だぎゃーw
きやつ等をぎゃふんと言わせるような策はにやーも？w」

伊佐久（亜沙羅）「おい・・・法真、ここの君主の言葉が私には理解不能だwこの人何ていつてるんだ？w」

- - - 出兵<一斉ターン

***年07月- - - - - 出兵 - - - - - 出兵 - - -

- - - 米施<攻城ターン

***年08月- - 以降、守備しをお願いします - - - - -

・後半25分〜29分・前半更新0〜5分の文官は攻城兵、その他は神鬼兵を徴兵下さい

・神鬼・後半攻城は一斉と同ターン、前半攻城は一斉より1ターン遅れて翌月出兵です

・前半武統率官は露払い役として一斉よりも1ターン遅れで出兵。兵種は弓にしてください

・お金のないOFF文官は雑1守備Lor米施をお願いします（ONにて後方MAX徴兵は可）

・は重要ターンです。資金のない人も出来る限り参加下さい

・攻城兵の方は出来ればONをお願いします。壁が見えないときは待機ください

・民忠が低いときは仁官は米施を優先ください。一斉徴兵ターンは大量米施を入力ください

法真より LANK「**」「筑前国」

/*（***） **：***

法真「一斉ターンの後半に攻城、そしてその次のターンに前半更新の攻城を入れれば、攻城兵は壁に突き刺さるでしょう。一斉徴兵月には仁官はピンポイントで米施を入れていきます。」

司馬霸「おみゃー、わきゃーのににやかにやかやるにゃーもw」

法真「お褒めのお言葉、恐悦至極にございます。」

伊佐久（亜沙羅）「何ていつてるかさっぱりわからんwまとも話ができる法真に脱帽だねw」

法真「先輩、聞こえますってw」

伊佐久（亜沙羅）「コマンドは見事だね。何と言っても無駄がない。城壁を削る分の計算も出来ている。」

法真「先輩にそう言ってもらえると安心です。仕様が複雑でまだこの鯖では戦術が確立されてないのが大変なところです。」

伊佐久（亜沙羅）「戦術つてのはこうした膠着戦の中から出ていくものなんだ。一度失敗した戦術を続けるとグダグダになり、仕官者のONも下がり悪循環になってしまう。」

伊佐久（亜沙羅）「だから失敗した戦術の分析とその改良・修正、もう一つは仕官者が興味を持つように工夫すること、飽きさせないこと、それがONを長期的に保つコツだね。」

法真「私もよく粹狂先生に注意されます、そこはw『これはゲームなんじゃ、戦力効率だけ考える用兵のみでなく仕官者を楽しませることが必要なのじゃ』と、ですねw私がやや理論に走る傾向があるんで、先生にはそこを見透かされてるようですw」

伊佐久（亜沙羅）「兵書に通じているのはいいことさ。私なんか兵書の有名な一文を断片的にしか覚えていないからなw」

伊佐久（亜沙羅）「しかし、ここで難しいのは個人資金だ。これくらの長さの一斉だと私の資金は大丈夫だけど、浪費癖のある仕官者もいるだろうに。そうした不確定な要素をどうするか、コマンドで物資消費が大きい鯖はこの自己管理が大変だ。」

この亜沙羅の予測通り、後半に資金が切れる将兵が何名か出て、1年以降の攻城兵の投入が上手くいかなかった。

しかし法真のコマンドの組み方は見事であり、戦果があったことも事実である。小田原国の城壁は7割程削ってもう後一押しと言うところであった。

ちなみにこの法真の作った一斉テンプレは、これ以降に紅鯖での最もスタンダードなテンプレとして重宝されるようになる。

一方、長期一斉を組んだ筑前国の物資消費量の損害も大きく、次の一斉を組むまでにその回復を必要とすることとなった。

物資回復をして立て直していけば難攻不落と言えども陥落させることが出来ることが分かり、筑前国は蓄財期間を設けようとした、その矢先である。

突然、同盟国であつたはずの陸奥国が同盟破棄及び宣戦布告を筑前国にしてきたのである。

この急転によつて十分蓄財する期間が取れず、玉砕覚悟の一斉を行うこととなつた。

司馬霸「陸奥国のきやつら、どえりゃゝむかつくでかんわゝ！こうにやつたら玉砕覚悟で最後の一片を小田原国にしたるてゝ！」

伊佐久（亜沙羅）「玉砕だと？私はそんなの真つ平だね。」

法真「先輩、聞こえますつてwwで、何か策はございませんか？」

伊佐久（亜沙羅）「あるにはある。が、私もこの仕様の鯖でやるのは初めてだから上手くいくかどうかは神のみぞ知るだ、理論的には大丈夫のはずだが。」

法真「先輩が『神』なんて言葉を使うのは珍しいですねw」

伊佐久（亜沙羅）「こんな何しやべつてるかかわからない君主と一緒に玉砕するのが近づいてきてるんだ、神にでも祈りたくなる心境だよw」

法真「で、その神からはどんな神託があつたんですか？」

伊佐久（亜沙羅）「神つて言葉を使えば何でも解決出来そうで便利だね。しかし現実はあるなりに甘くない。『神に祈れ』なんて書いた兵書はこの電脳空間に存在しない、それが全てさ。」

法真「確かにそうですねw」

伊佐久（亜沙羅）「この場合はアレを使わせてもらうよ、『孫子』の『勢五』の何だっけ・・・えーと・・・」

法真「『故に善く敵を動かす者は、之を形とすれば敵必ず之に従い、之に予^{あた}つれば敵必ず之を取る。利を以て之を動かし、卒を以て之を待つ。』ですか？」

伊佐久（亜沙羅）「そうそう、ソレソレwいやあ、どうも私はこう、

上手く格好が決まらないねw」

法真「記憶力だけが取り柄ですから、私はw」

伊佐久（亜沙羅）「どうも私は忘れっぽいw話の続きだが、つまりこうだ。まずこの鯖の特徴である米相場の変動を利用する。1月に米相場が高くなるが、こちらは損失を覚悟で一斉にこの時期に買うんだ。そうすると米相場は次の7月までは急騰したままになる。ここで敵が米を半年間、売りに出すはずだ。その半年は待機し、7月から一気に攻撃を開始する戦術、とまあこんな感じさ。」

法真「先輩の考えることは相変わらず恐ろしいwこんな人と絶対に戦いたくないですね、本当に同門でよかったですよ。米相場を誘導することで相手に売らせ、米を枯渇させたところを一気に突くのですね。7月の米収入があると言っても長期一斉には耐えられないでしょうし。そして相場は下がり、第一一斉被弾中なんかに米を買い戻す暇はないw」

伊佐久（亜沙羅）「そういうことだ。但しこちらは逆に金がいかに不足するから低コストの雑兵もしくはコストが米である人望兵を雇うのさ。人望兵は武力反映ありで人望が攻撃力に加算されるから雑兵よりも強いし、コストが米って部分がやっぱりいいね。」

法真「そこも盲点です。「人望兵」仁官」の固定観念がありますからね、どうしても。確かにステは重要ですが、そこに囚われない部分に妙を感じます。そして、米不足によって特訓コマンドや大量米施しが不可になるのは痛いですよ。この鯖は訓練に改造入ってますので訓練値がかなり重要です。」

伊佐久（亜沙羅）「そうなんだ、固定観念が人の思考を硬直させてしまい視野や選択肢を狭くしてしまう。戦略なんかは一度決めたら断行していかねければならないけど、戦術は臨機応変でないといけない部分がある。」

法真「柔軟な思考と強い決断力ですかw」

この亜沙羅の奇策が採用され、筑前国は1月に一斉売り、5月徴兵、

6月特訓で7月から一斉攻撃としていった。各自物資が尽きるまで最後の波状攻撃を行ったのである。

2月になると米相場は3・0と最大値まで急騰し、このことは小田原国の国内でも大きな話題になった。そして一般將兵から仁官までもがここぞとばかりに米を売りにだし、中には6月まで先行入力するOFF者もあり、米相場は数ヶ月で一氣に大暴落した。

そこに筑前国の一斉攻撃が来たものだから小田原国は大混乱に陥り、一斉第三波頃から訓練差が生じたことと、民忠維持が困難になったことで第四波以降、小田原国は組織的な抵抗を失った。

もちろん筑前国の消費も尋常ではなかったのであるが、迫り来る陸奥国との開戦期間が迫っているため、必死の攻勢に出て遂に第六波目で小田原国の前線が崩壊し、そのまま後は後方都市まで打ち抜き滅亡にまで追い込んだのである。

この戦いは、よく仕様を理解し、その仕様を利用して敵將の心を誘導し、その心の隙を突いた心理戦の典型であると言える。このようによく心を導くことができれば、例えばそれが奇策であつても成功すると言う一例であつた。

ここで亜沙羅・法真は、粹狂塾から「粹狂先生、危篤。急遽帰るべし」との知らせが入ったため、惜しまれつつも帰郷することとなる。紅鯖ではこの二人の巨大な將星の活躍は以後も伝説として語り継がれることとなるが、名をあげた法真に対して変名の亜沙羅は無名のままであり、ただ伊佐久と言う謎の智將の名だけが残った。

粹狂「どうやら飲み過ぎたようだわい、酒は飲んでも吞まれるな。ほっほっほ。」

法真「・・・また飲み過ぎたんですね、先生。」

胡蝶「すいません、私の早とちりだったかもしれませんがwビツクリしてつい個宛電報を打ってしまい・・・ww」

亜沙羅「まあ、元気でよかったですw」

粹狂「よい、よい。ほっほっほ。」

幾つかの逸話を金剛と三賢石の前で法真は話したのだが、特にこの紅鯖の兵糧攻めが印象に残っていたらしく、人事担当・石黄の手記には、この話のことが事細かに記録されていた。

そしてその注釈に「この亜沙羅の兵糧攻めの逸話は、戦国時代の名軍師・竹中半兵衛の三木城攻めをも思わせる程の知略である」と記されていた。

石黄は古の幻の大軍師・竹中半兵衛の心像と亜沙羅を重ね合わせて評価しており、ここでどうやら人事を決めたのではないか、とする説もあった。

もう一説には、亜沙羅はよく伊佐久の名を好んで様々な鯖で用いたため、断片的ではあるが公式ログに残っていたため、人事担当の石黄は独自に調査したとも考えられる。

第二十五話『背水の陣』

山吹・黄河国の同時破棄の36年1月から数週間後に亜沙羅が金剛国に入国、その1週間後の翌月に君主・金剛への謁見が行われた。輝く黄金の髪、青き瞳に落ち着いた表情、漆黒の法衣に身を包んだ姿。その容姿に金剛は只ならぬものを感じた。

金剛「亜沙羅、そなたは上は天文・下は地理に通じていると聞く。
いにしえ古に伝え聞く軍師のようであるな。」

亜沙羅「（こりや法真の奴、私のことを変に売り込んでるなw）」

謁見は簡単な挨拶から入り、雑談を交えつつもすぐに本題に入った。

金剛「そなたも知つての通りだと思うが、現在、当国はやや厳しい状態にある。十数名の人数差があり、在野の動きもどうやら連合側に流れているとも聞く。現在、の当国が取るべき戦略・戦術は会議室にある通りだ。そこで亜沙羅、そなたの意見も聞いたみたいと思
い今日は来てもらった。」

石紅【軍事担当】「『山吹国へは攻撃、黄河国へは守備』これが基本戦略である。後は戦術面での充実を計る段階にきておる。」

亜沙羅「では遠慮なく申し上げます。敵が兵力分散しているならまず国力・戦力ともに少ない山吹国の狙うのは当然の作戦です。しかしこれは逆に言えば相手にも読まれることにもなります。」

亜沙羅「こちらの動きが予測される場合、敵の両国は兵力の集約を計るでしょう。そうなると総合的な戦力差では当然ながらこちらが不利になります。」

金剛「ふうむ……。それではそなたは今のままでは当国は負けるであろうと見るのだな。」

亜沙羅「いえ、私は可能性の問題を言っているのです。純粋な戦力

差を見た場合を申し上げており、後は先行入力数やON数と言った蓄力・不確定要素が入りますので。」

亜沙羅「また山吹・黄河の両国は個人の人格がかなり影響している国家と思われます。そこで失礼ながら率直に申し上げますと、ご君主は戦略レベルでは行き詰っておるため戦術レベルで長ける朱璃を避けているようにも見受けられます。」

金剛は テストラスで朱璃の恐ろしさを思い知っており、それがトラウマになっていた。ONの間隙を突いて突進してくる朱璃の軍団はまさに脅威であり、時には本陣までの突入をも許し敗走することもあった。

この時の記憶が影響しており、意図的に金剛は戦術レベルにおいて朱璃を無意識に避けることとなっていた。これを戦力差と言う物理的なパラメータを理由に避けることを正当化している部分もあったのかもしれない。

もちろん、国数・戦力が小さい国をまず撃破するのは用兵学上では正しいため、金剛が朱璃を個人レベルで避けることを指摘する者はいなかった。

しかしここにきて亜沙羅がその金剛の深層の部分をついたため、金剛は自分の心の奥底を見透かされた気持ちとなった。

後に金剛は亜沙羅を疎んじ遠ざけることとなるのであるが、その処遇についての発端はここにあると見る説もある。

亜沙羅「困難なのは、戦略レベルでの不利を戦術レベルで挽回しようとする考え方です。相手が素人ならそれもできましょう。しかし当方と敵の指揮官のレベルが同等であるならば、これは困難であると言わざるを得ないでしょう。」

石紅「それで肝心な貴殿の考えは如何に。」

亜沙羅「私の考えですが、戦略の再構築をしつつ後に戦術で対応していくものです。」

亜沙羅「個人レベルで駆け引きをしていくのであるなら、ここでは戦術レベルで志風に当るのではなく、戦略レベルで朱璃を出し抜くのです。朱璃はやや好戦的な傾向があり、決断する時はほぼ攻勢に出ています。」

亜沙羅「一般的に見ても、この電脳空間の殆どの仕様が攻撃有利なので迷いが生じた場合は攻勢に出る可能性が高く、そこに隙が生じます。そして戦術レベルでは彼に多少の慢心と油断もあることでしょう。そこを一気に突くのです。」

そして亜沙羅はその壮大な作戦案を金剛とその同席する三賢石に話した。その内容は驚くほどの綿密かつ大胆なものであり、金剛はこれに賛同し作戦実行を許可した。これには彼の同門である法真の根回しがあつたともされる。

ただし、軍事担当の石紅は前案の作成に多少関わっており、それが否定された部分もあることからやや否定的ではあつた。しかし金剛もこの作戦を受け入れたことから最終的にこの亜沙羅の案件に同意の色を見せるに到った。

このことについて石黄の書き残した手記には、新参者である亜沙羅の作戦案を受け入れた金剛の器量を賞賛する記述が確認される。

この作戦の採用が決定され、すぐさま亜沙羅は法真とともに草案の作成に取り掛かった。

亜沙羅の地位は副軍師・法真の参謀として位置づけられた。そのため、この作戦案の発布は法真のものとして出された。

法真としてはこの偉才なる人物を前面に押し出したかったのであるが、亜沙羅は新参の名前では作戦が上手くいかないと説得されてのことである。

また亜沙羅はもし作戦が失敗したら、立案者は自分であると名乗り出ることも考えていた。そして成功した場合には法真の功績となることを望んでいた。

その作戦草案であるが以下の通りである。

【金剛国会議室】

【草案】対黄河・山吹国作戦説明スレ

基本戦略

黄河国：攻撃、山吹国：守備

許昌陽動堀化とカウンター一斉

開幕と同時に黄河国に1ターン先行入力でカウンター一斉を行います。

黄河国が守備し警戒とならないようにギリギリまで宛に滞在し、開戦直前の12月に集合で許昌移動となります。

法真より LANK「**」「金剛国」

/*(***) **:***

亜沙羅「敵は恐らく事前まで偵察をするだろう。守備枚数・滞在人数を殆ど宛に置き、許昌を堀とする。」

法真「所謂、カウンター一斉ですね。」

亜沙羅「そういうことだ。敵は早期にこちら主力に接し、戦力の集約を計ってくる。それをさせないためにもカウンター一斉は有効な戦術となるのさ。」

法真「つまり守りに入った山吹国は機動性失い、そこから離れるようにしつつ黄河国に侵攻するんですね。」

亜沙羅「タイミングを間違うところからも滅亡の危険性があるからこゝは当日の敵の出方にもよる。そこはON指示で対処だね。」

亜沙羅「それと宛をある程度堀化しておけば、黄河国へ侵攻した際に山吹国への堀として使える。但し、完全に堀化しすぎると開幕時

にこちらが危険なので、その加減が難しいところだ。」

法真「そこは農民数さえ仰って頂ければ私が計算して堀化していきます。」

亜沙羅「ああ、細かい計算は苦手なんでそのところは頼むよ。」

部隊

守備部隊（法真）・・・騎馬兵MAX守備Lにて所属を（敵は護衛中心と予想）。5名程でやって頂きます。人選は司令部から個宛で行います。

攻撃部隊（募集）・・・弓系中心で陳留出兵を先行入力（敵は騎馬中心と予想）。後半更新の人でお願いします。

法真より LANK「**」「金剛国」

/*（***） **：**

亜沙羅「黄河国の攻勢を誘うため、黄河は騎馬と予想。それに対するは弓だ。敵は騎馬で守備に切り替えることも予想されるね。」

亜沙羅「一方、守勢に回る山吹は護衛兵となる可能性が高いのでこちらは騎馬でMAX守備をする。」

法真「騎馬兵で一斉攻撃や護衛MAX守備Lと言つのはよく見ますが、騎馬のMAX守備Lは珍しいですね。」

亜沙羅「私も騎馬でのMAX守備Lは始めてだね。しかし兵種相性があつて理論的にはこうなるし、そこは臨機応変にさ。」

法真「確かに定理通りになつてしまうと、それ以上の思考と柔軟性を失ってしまいますからね。」

陽動守備

宛に守備40枚、許昌に守備を10枚とします。これは陽動のためです。

許昌は敵10枚以上の攻撃は壁壊滅を狙います。壁で壊滅させるこ

とでカウンター一斉が決まります。

城壁値が低くなり危険と判断した場合はON守備の指示を出します。
指示がない限り強気に攻撃をお願いします。

法真より LANK「**」「金剛国」

*/** (***) **:**

亜沙羅「後半はステがインフレを起こすからできないが、序盤ならまだできる範囲だろう。7枚前後は壁で止めれるんじゃないかな。」
法真「城壁値も戦力として考えていく部分にカウンター一斉のメリットはありますね。」

亜沙羅「ここで相手が出てきてもギリギリまで削らせて我慢することだ。そして2ターン以内に敵都市を陥落させることが条件となる。」

法真「カウンター一斉状態で計算上30枚以上の出兵が出来るなら2ターン以内の陥落は十分可能ですね。後は黄河国が攻勢に出てくれば。」

亜沙羅「金剛が朱璃を恐れて黄河国を回避するように、朱璃も金剛を意識しているはずだ。そして朱璃・志風は金剛の戦略をすでに読んでいるだろうからこの陽動にも十分乗ってくる可能性がある。後はこちらがどうギリギリの守備で対処するかだ。」

法真「しかし偉才揃いですね。これは国家同士の戦いと言うよりも個人戦ですね。」

亜沙羅「そこに心理戦を仕掛ける意味がでてる。物理レベルで総力戦をやれば相手が有利なのは分かりきっている。そこに付き合う必要性はないのさ。」

この亜沙羅の読み通り、朱璃・志風の両将は金剛の戦略を既に看破していた。しかし、この金剛と言う巨大の将星の輝きによって他の星々の光は目に付かず、この無名の一人の仕官者の入国がどのような

に影響するか等は誰も予期し得なかった。巨星・金剛を中心として他はその衛星として動いている、これが大方の見方であったのだ。しかし亜沙羅は金剛の衛星ではなかった。巨大な将星は眩いばかりの光を放つが、巨大過ぎる将星はその光をも捻じ曲げ呑み込んでしまつのかもしれない。この時の亜沙羅と言つ無名の将星は、宇宙空間に鈍く暗く漂うブラックホールのような存在だったのかもしれない。何はともあれ、それがこの時の最大の不確定要素となった。

亜沙羅「最後にオフコマだ。理論的には大丈夫なはず、後は運を天に任せるかな。」

法真「こんなコマンドは見たことないですね。ここまでやる必要性があるのでしょうか。」

- - - - - 武統 - - - 攻撃部隊 - - - 仁官 - - -

***年11月 - - ** - - - 待機 - - - ** - - -

- < 主力は宛に滞在

***年12月 - - ** - - - 集合 - - - ** - - -

- < 主力は許昌に集合移動

***年01月陳留出兵 - - 陳留移動 - - 陳留出兵 - - < ON攻撃

***年02月 - - 徴兵 - - - - 集合 - - - - 米施 - - -

- < ON攻撃

***年03月広陵出兵 - - - 集合 - - - - 米施 - - - <

ON攻撃は広陵優先

***年04月 - - 以降、守備し・米撒でお願いします

法真より LANK「**」「金剛国」

/* (***) ** : **

亜沙羅「打通一斉とでも言おうか。カウンター一斉が決まった後、敵は立て直すことが十分可能さ。特に朱璃の反応速度なら最速で立

て直してくるだろう。」

法真「朱璃の用兵は神憑りのなON指示にありますが、確かにこれの上に行くにはOFFで先行入力しかないですね」

亜沙羅「そうだね、この場合は後の先でいく。2ターンで陥落するにしても、陥落より前に反応する朱璃は移動を開始するだろう。恐らく移動先は内政値や城壁値の高い広陵だ。そこにOFFで入れてONも広陵だ。広陵が落ちて余力あればONは寿春に変更さ。」

亜沙羅「相手が二重の構えてくるならこちらは更にその先を見越していけばいい。」

法真「で、今回の作戦名ですが何にします？」

亜沙羅「そうだな。作戦名は・・・『背水の陣』だ。」

法真「・・・『背水の陣』いいですね。」

会議室には『背水の陣』と掲げられたスレッドが立った。多くの仕官者には、もう後には退けないという不退転の決意を示すものとして捉えられ、金剛国の士気は最高潮となった。

しかしこの作戦の本当の意味は戦術レベルで士気を上げるのではなく、戦略レベルで黄河国を引き出すと言うのが真の意味であった。

『背水の陣』・・・これは漢の名将・韓信の戦術であり、後には退けないと言う意味合いで故事成語として現代にも伝えられている。しかし川を背にして不利な状況を敵に見せることで城から誘き出し、空になった城を占領すると言う計略の面があることは余り知られていない。

孫子曰く、

故に善く敵を動かす者は、

之を形すれば敵必ず之に従い、

之に予うれば敵必ず之を取る。

利を以て之を動かし、

卒を以て之を待つ。

第二十六話『軍争』

黄河国の前線は僅か2ターンで崩壊し、間髪入れずに金剛国からの打通が後方都市に入った。しかも指揮官である朱璃は昏倒し、指揮官不在と言う絶対絶命の危機に黄河国は瀕していた。

黄河国に残された都市は寿春のみであり、命がけで鉄壁將軍・夏侯瑜が殿をつとめ、戦況を立て直そうとしていた。

一方で、山吹国は当初守備であったため進軍が出遅れていたが、漸く宛まで部隊を進めることができた。

宛の守備は法真の守備部隊が担っており、騎馬MAX守備しによるものであったので山吹国の護衛兵では相性が悪く進軍が遅れたのであった。

この法真部隊の守備陣を最初に崩したのは嵯允であった。

山吹国は開幕守備をとる戦略であったため推奨兵は護衛兵であったが、この嵯允は弓兵を雇っていたため、敵の騎馬兵に相性よくその守備を崩すことができたのである。

この電腦空間における大よその武將は、仕官学校なり私塾なりで学ぶのであるが、この嵯允と言う男は師を持つことはなく、全て我流で兵法を身につけていった。

嵯允は異国の派手な衣装に身を包み、琵琶を弾き詩を吟じると言う変わり者であり、人々は彼を我流將軍とも歌舞伎將軍とも呼んだ。

【山吹国宛】

嵯允「指令では護衛兵推奨ってなってるけど絶対こうしろ、ってんじゃねえんだよなあ。俺は思うところあって弓兵を徴兵させてもらうぜ。」

王廉「差允殿、こんにちは。金剛国の狙いは当国ですので開幕は守備となります。そのため、できれば護衛兵を徴兵してほしいのです。」

「
嵯允「ただよお、折角將軍職が余ってるんだし、敵の攻撃だって
騎馬で来られたら弓で受けた方が相性はいいだろお。だったら俺に
弓職をつけておいてくれよ。」

志風「確かに嵯允殿の言われることにも一理ありますねwそこは各
自判断でして頂く形でいいかもしれせんw」

王廉「作戦立案者の志風殿がそう言われるなら、それでもいいと思
いますが・・・。」

嵯允「志風の旦那、あんた、いい器量してるぜ。ばつちり戦争
では活躍してやるからよお、勝ったら祝い酒でも一緒にしようや
w」

志風「ああ、私は下戸なもので・・・wwwけど、嵯允殿の活躍に
は期待しておりますよw弓將軍として存分に活躍してくださいw」

もう一人活躍したのは騎突將軍と言われる紅葉である。

紅葉は攻守を兼ねる用兵を特徴としており、そのためパフォーマン
スのよい騎馬兵を徴兵することを常としていた。そのため騎馬vs
騎馬と言う同パフォーマンスの戦闘が可能となったのである。

初期の段階では騎馬兵はコストが高いため、平時の運用が重要にな
ってくるのであるが、これを徴兵可とするのはこの運用を上手く米
転がして行うことを紅葉は心がけていたことは特筆されるべきこと
であった。

嵯允「紅葉の姉さんは何でそんなに金米に困らねえんだい？」

紅葉「米コロしてるからよ。」

嵯允「米コロ？」

紅葉「米転がしのことですよw」

嵯允「なんだい、それは？」

紅葉「米相場は0.8〜1.2までありますが、0.8の時に米買
い・1.2の時に米売りを先行入力でコマンドストックしていくん

です。そうすると金2400で購入、金3600で売却となり800の利益が出ます。これが米コロよ」

嵯允「へえ、wけどそれじゃ、貢献が入りやせんぜ。」

紅葉「そうね、それだと貢献が稼げず階級もあがないから売買の間か後に内政を2コマ入れていくのよw」

紅葉「私は武官なのでそこを守備として、「売り>買い>守備>守備」の4コマループにしているので年間これが3回できます。ですから、年間転がす分の利益は「800*3」で2400多く稼ぐことがでるのよw」

紅葉「それより嵯允君、またお酒にお金使っちゃったんでしょw」
嵯允「違いやすよwいい武器が欲しかったから買ったらすっからかんになっちまったのさw」

紅葉「運用は計画的にですよ 初期の頃の武器は飛燕までにしておきなさいw書物なら墨子が六韜くらいまでねw」

嵯允「はいよw」

嵯允は人の言うことよりも自分の考えを優先するやや癖のあるタイプの武将であつたが、この紅葉の言うことには幾分耳を傾けることもあつた。

紅葉は嵯允よりも3つ程年上であり、この我侬で自我を貫き通す嵯允を弟のように可愛がった。誰からも理解されることのない嵯允に対して紅葉はよき理解者であつた。そして、この鯖の山吹国に紅葉を誘つたのは嵯允であつたことは余り知られていなかった。

この嵯允の弓徴兵の注目を逸らすために、紅葉も騎馬徴兵を買って出たのである。このことが幸いし、両者の連携によって亜沙羅・法真が予想するよりも早く宛は陥落した。

更新時間は嵯允が前半、紅葉は後半であり、嵯允は常に守備しに任せて出兵し、紅葉がそのまま攻撃するか守備するかの判断をし、常に紅葉は嵯允の補佐役に回っていた。

今回の金剛国の宛へは、嵯允の連続出兵で法真部隊の騎馬兵を駆逐し、紅葉の騎馬兵が宛を陥落させたものであった。紅葉の騎馬守備によって金剛国のカウンターが阻まれ、志風の部隊移動も速かったため、金剛国は山吹国の宛拠点化を許す結果となった。

これは個人レベルでの戦術であり、流石の亜沙羅も当然ながらそこまでは読むことは不可能であった。

亜沙羅「意外と山吹国の進軍が速いな。これはやや予想外だが、作戦がいつも計画通りいくとは限らないからねえ。」

法真「あの弓將軍と騎馬將軍の連携、なかなかやりますね。」

亜沙羅「戦略レベルの修正は困難だが、戦術レベルの修正なら何とかできるね。これでカウンターが今のままでは失敗することがわかった。次はカウンターの枚数をやや増やそう。一回カウンターが入れば、ゆつくりとこちらは寿春に当れる。」

法真「そうですね、OFFカウンターの枚数は1枚追加であればON対応で注意しつつとおきます。」

亜沙羅「ああ、そうしておいてくれ。細かい現場の指揮は法真に任せたよ。」

こうした山吹国の猛攻は予想外であったが、これに対応した亜沙羅の柔軟性、法真の判断の的確さも見事なものであった。

一番驚いていたのは志風であった。この時の金剛国の指揮官が亜沙羅であったことは、まだ世間の知るところではなかったのであるが、この金剛国の取った戦略・戦術性の高さをこの時点で理解していたのは唯一、志風のみであったのである。

志風「（何と言うことだ。金剛国は堀と見せかけて黄河国の攻勢を誘い、更に打通を先行で入れるとは。この金剛国の進軍の速さはONでは不可能だ。そして朱璃殿は立て直せるであろうか。）」

紅葉「あの……。兵法に『軍争』と言う言葉がありますが、なぜ後から許昌に移動してきた金剛国が黄河国の先手を取ってしまったのでしょうか。。。」

軍争：敵より先に戦場に到着して主導権を握り、有利な体勢を作ること。

志風「これは『迂直の計』として兵法にあることなんです。そしてこれはONではなく、確実にOFFでやっているということです。」
紅葉「・・・こんな先行入力が果たして可能なのでしょうか、正直、信じられません。」

志風「そうですね。。しかし、ここまで大胆な戦略・戦術を金剛国が仕掛けてくるとは。金剛国の過去のデータにも、このような行動パターンはありませんし、と言うよりも、私が今までプレイしてきたですが、これ程の作戦は見たことがない。」

孫子曰く、

迂を以て直と為し、患を以て利と為せり。

故にその途を迂^{みち}にして、之を誘^{いざな}うに利を以てし、人を後れて発し、人に先んじて至る。

此れ迂直の計を知る者なり。

（軍争 一）

第二十七話『神算鬼謀』

4月：山吹国が許昌を支配しました。

4月：金剛国が許昌を支配しました。

志風「敵はカウンターの枚数を増やしてきたか。」

紅葉「既に許昌は完全に廃墟となっています・・・。」

志風「黄河国に対しての堀と思われた許昌が、当国に向けての堀になるとは・・・何と言う事だ。敵の指揮官にこんな用兵をする者がいるは。」

紅葉「次、支配したら拠点化しますか？」

志風「ううむ、5月支配するとして、そこからONで民忠を上げても7月か。そこまで黄河国が持ち堪えることができるであろうか。それに7月までに民忠回復と守備維持できると言う確証はどこにもない。」

「べんべけべんべん」

と、その時、琵琶を弾きながら颯爽と登場したのが我流將軍・嵯允であつた。

嵯允「よお！何難しい顔をしてんだいw」

紅葉「戦時中ですよ、嵯允w音楽は慎みなさいw」

嵯允「銅鑼はよくって琵琶はダメなのかい？それに軍規に琵琶弾いたらダメとは書いてねえぜw」

志風「やあ、嵯允君だっけ。君は今の状況をどう打開していけばいいと思うかい？敵のカウンターと堀で拠点化と進軍が困難なんだよ。」

嵯允「それなら拠点化せずにそのままぶつかましたらどうだい。カ

ウンターの数に敵は増やしたんだ、それに寿春への圧力はそんなに減っていないから、きっと本体は薄いはずだぜい。」

志風「なるほどねえ。けど、強襲するにしてもどれだけの攻撃枚数を確保できるだろう。城壁まで辿りつけるだろうか。」

嵯允「そこは先行入力を許昌にしておいてだなあ、部隊所属でこっちの部隊埋めて、こっちがカウンターいれた瞬間にズドンだぜい！」

志風「しかし圧力は継続的にかけていかないとやはり効果がでないと思うのだが、どうだね。」

嵯允「それなら部隊を「移動＞集合＞移動＞集合」の4コマにして、所属者を「出兵＞徴兵＞訓練＞出兵」と入れておけばいいんじゃないかなあ、と結構思いつきで言ってみるw」

志風「（この嵯允と言う男、奇行が過ぎると評判だが案外切れる人物かもしれないな。）」

紅葉「すみません、志風宰相。この者は目上の者の口の利き方も知らず、また無学故、どうぞ失礼をお許しください。」

志風「いえ、いいんですよ。この電脳空間ではリアルな地位・年齢・ゲーム内での役職・階級等とは関係ございません。地位に縛られず世代を超えて交流できるところがオンラインの魅力の一つですからw」

嵯允「おつ、宰相さん、アンタ人間ができてるねえ。紅葉の姉さんもいい年なんだからさあ、こう言う人にもらってもらうといいぜえ。」

紅葉「こら、嵯允！今、年齢はここでは関係ないと言われたばかりでしょw」

嵯允「おっと、コワイコワイw」

通常の戦略は、まず都市を復興させてから拠点化して守備と内政値を安定させた後に進軍していく。これが戦略セオリーである。

しかしこの場合、黄河・山吹国は共闘戦略を取っているため、進軍速度も重要となってくるのでセオリー通りに行っていくと、金剛国

既にこの時、志風は黄河国が敵の誘いに乗ったことで戦略的敗北を八割程、悟っていた。

セオリー通りやっていけば敵に対応され敗北は必死なのも分かっており、どうするかに迷いを生じていたところであった。

移動集合出兵ループ

[illegible]

136

・本部隊が集合をかけ拠点守備が維持可能ならカウンターは必要なくなります。

・農民が回復するまで、部隊所属して出兵ループをお願いします。

志風より LANK「**」「山吹国」

*/** (***) **:**

その頃、寿春では部隊集合が掛かり、漸く守備しが機能し始めた。とは言ってもやはり守備要員が不足しており、元帥・朱璃は気を失ったまま運びこまれ、殿を努めた夏侯瑜は消息不明であった。そのため遊鈴・胡弓と言った、本来は攻撃部隊の将官も護衛兵を徴兵し守備に回ることになった。

亜沙羅「今だな。」

法真「騎馬・・・に変更ですね。」

攻撃部隊が護衛兵となった瞬間を亜沙羅は見逃さなかった。彼はまさにこの瞬間を待っていたのであり、彼の言葉に法真もすぐに反応した。

法真「カウンター部隊はそのまま攻撃を緩めず、後の部隊は5月全軍騎馬に雇い換え>6月・7月一斉攻撃、続いて8月徴兵>9・10月一斉攻撃をお願いします。」

しかし山吹国・志風が作成した先行打通コマンドは5・6月出兵となっていたため、この指示と同時に金剛国の本体が滞在する陳留に攻撃が入った。

亜沙羅「敵もなかなかやるなあ、この枚数はOFFで入れてきているのかもしれないね。」

法真「はい。カウンターが決まった瞬間の出兵枚数が多いので、そこに計画性を感じます。」

亜沙羅「しかしこちらも手を休めるわけにはいかない。相手からの攻撃は守備Lに任せて、ONしたものをから寿春に先行入力に切り替えてもらおうか。」

法真「そうですね、私の守備部隊がMAX守備Lをしてますので、壊滅後は許昌廃墟化なのでそう簡単には再徴兵できないでしょう。」

寿春の城壁値は600であり、そのうちの半分の300程が金剛国の6・7月一斉によって削られた。

しかし金剛国も決して余裕ではなく、山吹国の5・6月一斉によって守備15枚あった守備が残り5枚まで減ることもあった。

山吹国の次の戦術は7月徴兵＞8月訓練となっていることから、再び金剛国の守備Lが浮上。

金剛国の戦術は8月徴兵＞9・10月出兵となっており、前の一斉で城壁半分まで削っていたので、この一斉が決まれば寿春は陥落することとなる。

【山吹国国宛】

胡弓「国宛失礼します。黄河国・臨時軍師の胡弓と申します。敵の騎馬一斉によって当国の守備は壊滅、城壁が半分の300まできております。連続一斉が組まれた場合は陥落の可能性もございますので当国は登用解禁とさせて頂きます。不甲斐ない同盟国で真に申し訳ございません。」

『登用解禁』の国宛は滅亡の覚悟を意味する。この電腦空間では、国家が存続中による登用は一般的には行われない（コマンド欄には一応、謀略とあるが『引き抜き』としては一般的に使用されていない）。

朱璃・夏侯瑜は不在、遊鈴は孤軍奮闘、黄河国では胡弓が臨時の外

交官として、登用解禁の入電が山吹国に対して行われたのである。もちろん、初心者君主である馬翔の確認はとつてのことであつた。

【黄河国国宛】

志風「国宛失礼します。弊国は同盟国として貴国を最後まで決して見捨てることは致しません。直ちに全軍を挙げて貴国救援に向かいます。何とか持ち堪えてください。」

遊鈴「みんなあー！俺達が諦めたら同盟国だって終わっちゃうぜ！朱璃・夏侯瑜が復帰するまで持ち堪えるんだ。敵は騎馬突撃だ、これに対して弓徴兵でこちらは待ち構えようぜ！」

司令官不在の黄河国は士気落ちが激しかったが、この志風の国宛入電と遊鈴の孤軍奮闘に鼓舞され、再びON守備と守備しは浮上し盛り返した。

法真「勝ちましたね。」

亜沙羅「ああ。」

誰もが金剛国の勝利を確信していた。

しかし次は来ないであろうと思われていた打通一斉が、再び金剛国の陳留に強襲したのであつた。

しかも弓徴兵を志風は指示していたため、毎ターンごと弓兵が増え、更にこのターンは文官までもが大量徴兵していた。

志風は恐らくこのターンが最後のターンになるであろうと予期し、最大限の徴兵数と資金の放出を全軍に促したのである。

この山吹国の捨て身の攻撃によって序々に金剛国の守備は削られていった。

法真「農民数が僅かなのになぜ、これほどまでの出兵が可能なのでしょうか。」

亜沙羅「法真、前の敵一斉は何月だったかい？」

法真「ええと、5・6月一斉です。」

亜沙羅「今の一斉が9月なんだ。通常の一斉なら、そこから7月徴兵だから8・9一斉になるだろう。」

法真「確かにそうですね、なぜ1ターン待機する必要があるのでしょうか。」

亜沙羅「同盟国が危機に瀕しているのに待機するのは戦略的にはおかしい。これは戦術的なものじゃないかな。」

法真「と、言いますと。」

亜沙羅「つまり、ONで後方徴兵しているのじゃなくて、4コマンドで部隊長が移動している、だからコマを「徴兵＞出兵＞出兵」の3コマとすると1コマの待機が出てくる、こう見るべきではないかな。」

法真「なるほど、それならその待機の説明がわかりますね。」

亜沙羅「問題はそのコマンドを何名が入力しているかだ。こちらの守備しが15枚として、敵コマンドを「徴兵＞出兵＞出兵」とすると守備しに対する機動力はその2/3となる。ONも含めて実質の攻撃枚数は10枚くらいだろう。これは廃墟化してる都市からの攻撃にしてはやはり多いね。」

法真「それなら次はもう少し入力数が増える、と言うことですか。」

亜沙羅「そうなるだろうなあ。敵にも面白いことを考えるのがいるもんだねえ、と関心ばかりしちゃいけない。」

法真「現在、こちら守備4枚、寿春は守備壊滅、城壁露出です。どうします？少しは守備をしますか？」

亜沙羅「いや、全軍突撃でここはいくべきだ。」

法真「わかりました。そう全軍に伝えます。」

我流將軍・嵯允の先行打通攻撃は型破りであつたが、それを志風は採用し即実戦レベルにまで引き上げたことは特筆すべきである。しかし僅かな情報から軍神・亜沙羅の神算鬼謀はそれらを一瞬で看

破し、更に彼我の攻撃枚数も既に計算していた。

登場人物

金剛皇帝

序盤はガチガチに外交で固め勝てそうな相手を選んで順番立てて破棄していく戦略性の持ち主。

戦争とは数の勝負が持論であり、その人脈と登用力からその勝利は開戦前から決定される。その完全なる戦略性から完全皇帝と言われる畏怖される。

自分の意見に賛同するものは厚く遇するが異なる意見や提案するものは排除する考えの持ち主でもある。側近中の側近である三賢石と呼ばれるこの三人衆を用いるのはそれ故であると言う。しかしそこには全体にも影響を及ぼすほどのもう一つの大きな闇が存在しているのである。

外交は地形・人数差関係なく前期からの繋がりある国優先としているためコネ外交とも噂される。

朱璃

誇り高き統率官。清廉潔白な孤高の士。尊厳元帥。常に陣頭指揮に立ち、全軍を鼓舞する。相手の一瞬の隙を突いて神速の用兵を行う。白銀の鎧に銀色の髪、白いマントを纏い戦争中には常に敵味方関係なくその存在を晒す。

志風

その類い稀なる手腕によって一国を動かし、全体の流れを一名で作り出すことができる政略家。高い理想を持つが、時にはリアリストとして動くバランス感覚を持つ。

紫の法衣の下には無数の傷があるとも。

法真

幼少の頃から兵法を学び若くして頭角を現し麒麟児と噂される。電脳模試で初の満点を叩き出し俊英將軍の称号を授かる。データを讀み取ることを得意とし、その解析によって敵の攻撃を看破する。

亜沙羅

寡兵であつても臆する事なく大軍に当たり、そして勝利する。しかしそれは彼が勇猛な武将ではなく自らの智謀によって勝機を導き出し勝算を確信するからである。

漆黒の鎧に身をつつみ、金髪を靡かせる。

兵法の天才、軍略の神とも言われることから軍神將軍と称される。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6713m/>

～三国志NET物語～ 『将星流転』

2010年10月10日06時51分発行